

駒

zone

8



目次

電将短歌

駒とおむすびとペンギン 浮島

駒.zoneガールズ 序章 欠片食器

七割未満(八) 清水らくは

詰将棋の創作過程について 会場健大

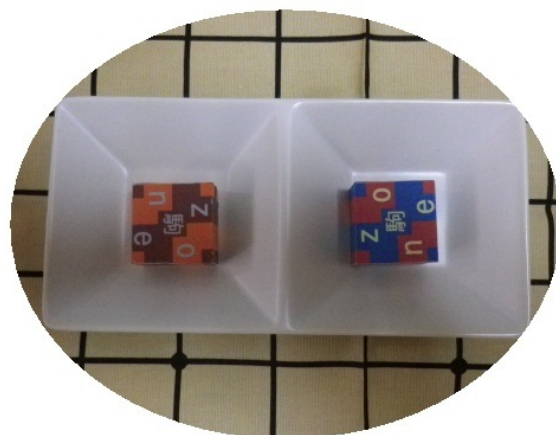
駒.zoneの作り方(2) 清水らくは

将棋短歌 どっともっと・落波

駒.zoneガールズ 第一章 欠片食器

あとがき

作者紹介



人ト電腦ハ再会シ、年ノ瀬ヲ共ニ過ゴシタ。

なつかしの棋士と指せます超時空電算機式将棋システム

浮島

本当は地球自体が電腦で輪廻の棋譜を操っている

落波

快速で詰め将棋を解く学生とアンドロイドのための音楽

浮島

繰り返サレル局面ハ、二人ガ二人デアル証ナノカ。

暗算で解けなかった問題はやっぱり解きたい暗算だけで

落波

春になる対局室で抱きしめてデイジーベルの瞳のひかり

浮島

コンピュータ太陽に透かしてみれば僕らと同じ真っ赤な血潮

跳馬

結論ハ別ノ道ヲ辿リ、ニツノ星ハ巡リ巡ッテイル。

負けられぬただ負けられぬ電腦に向かいて駒は淡々となる

なしも

情のないコンピューターの評価値の向こうに見える一喜一憂

しゅう

素知らぬ顔で青空映すスクリーンその苦しみを知っているのか

しむしむ

歴史ハ紡ガレ続ケテイル。



将棋短歌という無茶な作品形式を見切り発車ではじめてから随分時がたったような気がする。思えば色んな歌が駒.zone誌上に登場してきた。ぼくは将棋に関しては素人で、将棋ファンの多くの人から怒られてしまうようなミーハー層の間だ。けれど短歌のほうはそれなりに変なこだわりがある。

そこでぼくは
「将棋短歌とは一体何？」
というどうしようもないちゃぶ台返しの疑問をいまさら考えたのだ。

それは短歌を短歌たらしめている装置とは何かというくらいくだらない疑問だけれど今回はすこしでもその疑問をはぐらかす答えを見つけたいと思い筆を執った。

将棋短歌とはなんなんだ。

「月曜9時の将棋短歌」

艶やかな駒の音色の響くとき長い黒髪はらりと落ちる（しむしむ）

団体戦止まぬ震えを押し込めて一、二の、三で銀をつまんだ（落波）

冬囲い余映の盤上外見やりあなたの気持しらず穴熊（どっともっと）

一首の裏にある種の物語がある歌というのがある。

共通の特徴として歌の背後にドラマがあって、それに歌が立脚している。

この場合「わたし」の存在はどこへ行った？だとか

リアリティとそうでないものの境界とは？なんていう話が気になるのだ。

たとえば

団体戦止まぬ震えを押し込めて一、二の、三で銀をつまんだ（落波）

というこの歌は「棒銀」をテーマにしたときに詠まれた作品だ。

プロ棋士の名前を素材に使っている以上、背後にあるドラマが確実に存在していると考えていい。

歌の背後に物語があるが、これはおそらくフィクションだ。

ここでの「わたし」は感情移入する存在か、もしくはただの傍観者になっている。

まるでテレビの向こう側の世界だ。脚本家と役者の視点の違いかもしれない。

艶やかな駒の音色の響くとき長い黒髪はらりと落ちる（しむしむ）

「わたし」は女性の髪の毛が落ちるのを見つめている。

一本一本がしだれる映像を主人公、もしくはディスプレイの外から眺めているような感覚だ。

こちらはもしや実景かもしれないが、女性の指し手の背後の文脈を読者は考えてしまう。

実際に女流棋士のこういった一つのしぐさを垣間見たのかもしれないけれど

興味が向くのはいずれにせよその背景になってくる。

将棋がどこか近いようで遠い、遠いようで近い。

ではこのタイプの歌を詠む人にとっての将棋とは一体何なのだろうか。

将棋は短歌の中で小説化していく。

いや、むしろ元々本人の中で小説化していた将棋が短歌の中で顕在化するだけなのかもしれない。

距離感のある「現実」が語られていて、リアリティが完全に心的なものになっているのだ。

「人生が何とか詰まないように哲学する棋譜」

人はいつ直進するのを諦めて右銀までも近くに置くの（落波）

コンピュータだから強くて当然と言うなら教えろ「だから」の根拠を（いっくん）

わたくしとあなたの角を交換し始まる日々を勝負と呼べり（こでまり）

短歌の背後にドラマがある場合もあれば、短歌自体が概念的なものもある。

コンピュータだから強くて当然と言うなら教えろ「だから」の根拠を（いっくん）

先ほどとは違い将棋自体が一種の問題提起になっている。

たしかに将棋というものは色々な問題をプレイヤーに呈示してくれる。

一つの定跡が生まれるためには多くの研究が必要だし、検証や実践が欠かせない。

きっと将棋自体が巨大なブラックボックスなのだ。

その問題は人生の視点にも拡大する。

人はいつ直進するのを諦めて右銀までも近くに置くの（落波）

これは棒銀を詠んだ歌で駒.zoneでも初期の作品だ。

「なぜ」

を呈示するために将棋が短歌になっている。

将棋とは一体何なのかという問題はおそらく尽きることがない水源だろう。

折々に人はそれぞれモデルを定義する。

わたくしとあなたの角を交換し始まる日々を勝負と呼べり（こでまり）

角交換から始まる日々が勝負、というのも中々うるおいのある火花である。

ここではコミュニケーションが勝負になってしまっている。

そもそも人のコミュニケーションは明示的な意図のある情報の送信と

それを受信して解釈する一連の工程が支えている。

角交換を誘う発信と
角交換を受ける受信と

その二つがふっと匂う感じがする。これが将棋だってよオクサン、ともすれば吐息が互いにかかりそうな距離感じゃないか。

これらのタイプの歌には、将棋という問題に対する答えを定義する際に自分がにじんできくる。どうやら人は将棋をしばしば考えるらしい。しかも勝負とは別の次元で。

これもまた独特の距離感だ。

将棋とは何かを短歌という枠を通して定義しなおしている。

将棋とは何なんですか？ あなたの意見をお聞かせください。

「ハローCQ ハロー角交換そしてグッバイ死んでいった棒銀たち」

棒アイス三本目の甘ったるさで相入玉を宣言できない（落波）

ゆっくりと棋譜を並べるそれだけで天野宗歩に会いに行ける（跳馬）

滝を止め鰻重頼張りチョコ食べて讚美歌歌うひふみんのうた（茶虎）

将棋のあるあるネタやなるほどなあというネタを題材にする歌もある。

ここでの将棋はコミュニケーション枠に似ている。

特に棋士の話題が多い。

メッセージは時間を隔ててコミュニケーションをするものだ。

あるあるネタや時事ネタというものは鮮度が命である。

棒アイス三本目の甘ったるさで相入玉を宣言できない（落波）

この歌のように夏の、しかも一人の棋士のネタに絞る詠み方もある。

鮮度が時間とともに風化して行って、通じなくなるはかなさというのは

時事詠の宿命であるが、ひ〇み先生の記憶は色あせない。将棋短歌の〇ふみん率高し。

その心意気、プライスレス。

将棋話がある種のコミュニケーションツールであるのは私もなんとなく感じていた。

それは趣味としても、言ってしまうと専門家としてもさして珍しい事ではないだろう。

将棋のある日常とでもいえばいいだろうか。

ただわたしたちの発した言葉には二種類があってその場ですぐに消えていってしまうものもあれば生涯にわたって傷を作るような声もある。

ゆっくりと棋譜を並べるそれだけで天野宗歩に会いに行ける（跳馬）

時間にあまり限定されていないというか、瓶の中に手紙を書いたようなものだというか。

そのような時間感覚の自由さがこの歌にはある。

おそらく十年後に将棋の好きな誰かが読んだとしても

「ああ、こんなことを思った人がいたのか」

なんて考えることができるはずだ。

それに歌の中で詠み手は天野宗歩に会いに行っている。

棋譜というメッセージを通じて時空を超えて会いに行くことができるというのだ。

すごい壮大なタイムリープだ。

もしもそれが本当ならば私たちは何人の棋士と対話ができるというのだろう。

「わたしこんなにも将棋が好きなんです」

「まだ負けたくないんだ。負けたくなかったんだ」

「なんであんなに強いんだ」

そういったメッセージが棋譜や将棋短歌から発信されてるのかもしれない。

日常から非日常のレベルまでみんなメッセージを残す。

メッセージには誰かが気付いてくれるはず。

短歌でそれをわざわざ残そうとするのは、いうなれば風船に手紙をつけて飛ばすようなものなのかもしれない。

わたしと、交換しませんか？

そう思いながら詠まれる歌があってもいい、それはささやかな願いではないだろうか。

「呼吸できない将棋の神様」

この橋を振り返らずに渡り切り京の少女はおとなと成りぬ（こでまり）

なつの空はソーダアイスの色、そして空を飛べない香車のお墓（浮島）

象徴としての将棋短歌も存在する。メッセージ式将棋短歌と違い、こちらはあんまし人気がない。

そもそも詩文芸としての象徴性を語ろうとするとひどく面倒くさい。

だってシンボルってなんだ？といわれると何とも説明がしにくいんだもん。

「考えるんじゃない、感じるんだ」と言えばいいだろうか。それもなあ……。

とりあえずここでは「そうとしか表現できん何か」としておこう。

「あなたの将棋人生を31音の短歌に表現してください」という無茶な要求があったとしよう。それは何とも無理難題で、普通に考えたら何万首の短歌を詠んだとしても全てを記述する事は出来ない。

それでも自分の中の将棋を表現しようがんばれば、大体象徴という結論に落ち着く。

「わたしにとっての将棋とは、もうこうとしか表現できんのです」という形で詠むしかない。

この橋を振り返らずに渡り切り京の少女はおとなと成りぬ（こでまり）

京都の渡月橋での風習がこの歌の背骨にある。

数えて十三歳を迎えると子供は橋を振り返らずに渡らなければいけない。

香車って何？という無茶な質問に対して「香車ってこれ」と答えているのがこの短歌だ。

「香車とは女の子みたいなものなの」

「香車は女の子だ」

というのなら比喩の範疇なのだけれど

「香車は渡月橋の、あの女の子としか言いようがない」となるともはや言い換えとしての機能、つまり比喩の守備範囲を逸脱してしまう。こんな風に答えられたら読者はもう納得するしかない。降参だ。

そうか。香車ってお砂糖とスパイスと素敵な何かでできているんだな。

……パネェな。萌える。

また象徴のもう一つの特徴として「そうとしか言いようがないから、どう解釈しても要素にしかない」というのがある。

なつの空はソーダアイスの色、そして空を飛べない香車のお墓（浮島）

自歌自注は野暮の極みだけれど香車って何？という問いに対しての私なりの答えがこの歌だ。
わたしとしてはこうとしか言いようがない。

いただいた歌評では「特攻隊を思い出す」とか「飛行機」という意見があった。
他にはどんなものがあるだろう。空を飛ぶ香車を想像するだろうか。それとも盤面を直進する比
喩だと思うだろうか。

香車という生き方への憧れ？ 香車への心理的投影？
夢を書いたテストの裏……ぼくはかねもちになりたい？

おそらくどうとでも解釈できてしまうだろう。千人が読めば、千人なりの答えがでてくる。（と
いいなあ）

全てを語っているのか、それとも何も語っていないのかは判断が難しいのだけれどとにかく「ど
う解釈しても要素にしかない」のだ。

なおかつ面倒なことに作者はまったく無意識的なもんだから
どういう意図を持って作ったのかうまく説明できない。

（場合によっては意識的に狙った！という人もいるかもしれないが、狙ったものが予期せぬ何か
を書いてしまっているという恐ろしさは多くの歌詠みが体験する恐怖でもある）

象徴というとなかなか難しいけれど、こうとしか言えないんですよ……という少し贅沢な感じがする
。
あなたの全てを受け入れるワガママボディ、それが象徴的将棋短歌なのかもしれません。

「しょうぎとわたしの距離」

こうやって振り返ってみると将棋短歌作者と将棋との距離がわかってくる。
ある人はコミュニケーションの枠として、またある人は定義するものとして、それぞれ将棋を短
歌で語ろうとする。

実際、私の書いた将棋短歌が象徴性一本やりなのも距離感が関係していると分析していいと思う
。
ミーハーな私にとっての将棋はどこか象徴的なものなのだろう。
白いキャンバスだとかロールシャッハテストのようなものなのだけきっと。

将棋ファンにもいろいろな形があるけれど、その関わり方の最も正直な告白が将棋短歌なのかも

しれない。

将棋短歌を作ると言う文化がもっともっと広がると私はとても楽しい。

いろんな人が「わたしにとっての将棋」を告白している。

それは作られた告白なのかもしれないし、嘘をあえていっているのかもしれない。

けれどそれらはすべて心理的な活動によるものだ。嘘も含めて全体が真実だ。

投了をする度脱皮繰り返しいつかは盤の空をはばたく（落波）

編集長やわたしはどれだけ告白してきたのかわからない。

これはもう恥ずかしいレベルだ。

エゴイズムの塊といわれると弱ってしまう。そうなのかもしれない。そうだ。馬鹿め。

.....思えば私も恥の多い人生を送ってきました。

私はいろいろ失格です。

だから私以外の将棋ファン合格の人たち。

あなたにとっての将棋を教えてください。

「沈黙がぼくにはあった朝焼けのりんご畑で作るシードル（浮島題詠：金）」

象徴性と将棋、それなら象徴をおむすびに投影してみてもどうだろう。

という謎の発想跳躍から、そもそもこの企画のおむすびは始まった。

桂馬にはワサビマヨ+たくあん+白ごまというトリッキーな味わいを。

香車には一本義に梅干し+海苔まきを。

銀は銀シャケ（安易！）

角はちょっと角度を変えて料理した焼きおむすび。

ほんと当時の俺のカオス脳を解剖して見たくなる。

焼きおむすびにいたっては写真すら載せていない。

俺は文字書きなんだから文字で勝負するぜ！と息巻いたはいいものの

結局はブログ文体である。文章力なんて俺にはなかった。

短歌書いてる？

短歌にきれいな統語はいらないだよ！ ざんねんだったなチョムスキー！

とりあえず象徴を語ったからには象徴のおバカな面も語りたい。
心理学的にはおそらくおむすびに金イメージを投影する、という作業になる。

わたしが金で連想するのは卵だ。
ふわふわとろとろのオムレツが頭に思い浮かぶ。
コンコンとフライパンの柄を叩く料理人の技術で、少しずつ卵がまるまっていって姿。
感動だ。まさに感動だ。
あんなに殺人的な舌触りの物体が口の中で溶けてしまったら思わず笑みもこぼれようものだ。

人はきっと「おほっ、ほほほほ……」なんて情けない笑い声をあげてしまいがら咀嚼するだろう。
ああっ食べたい。ミルク入りのふわとろプレーンオムレツ。
ぐりとぐらの絵本みたいな……。……。

ところでこのオムレツ、おむすびになるかということそれは難しい。
きっとデロデロにだれた卵汁が米をびしゃびしゃにしてしまうだろう。
手も汚れてしまうし、こちらはちっとも羨ましくない。

実際よくあるのは錦糸卵を作るよううす焼きの卵焼きを巻いたものだと思う。
あれはあれで、ふんわりと甘くやさしい味がする。
中身の具はおかかだろうか。
それとも佃煮？
いずれにせよ甘しょっぱい味が似合う気がする。
でっとりぼってりした太太しいおむすびではなく
小さい、手毬寿司のような大きさならより美しいだろう。
赤いぷりぷりのイクラがのった茶巾寿司もグッドだ。

ああ、その美しさたるやまさに値千金。
金駒を名乗るにふさわしい造形だろう。

……ところで実際、金駒とはなんなのだろう。
私は将棋をプレイすることがほとんどないので例のごとく編集長に聞いてみた。

「使いどころにもよるけれど、飛車と同じくらいに強い感じがする」
「銀は金に比べて今一步というか、進んだら前に下がれないんだよね。ちょっと残念系なんだ」
「やっぱり、金と銀なら金かなあ」

という印象らしい。ちなみに彼は銀駒娘のファンである。なぜこうも推しメンの駒娘をけなすのだ。

.....もしや釣った魚にえさをやらないタイプなのだろうか。許せん。

たしかに相手を攻めきろうと王手をかけるときなんかは、金があると安心感がぐっと強まるような素人イメージがある。

守る側にしても「あ、金がある」という安心感は素人なら漠然と抱くんじゃないだろうか。

今回、駒娘を描くにあたって若葉さんと私の間では「金は金持ち、ゴージャスならお嬢」という謎のスローガンをかかっていた。

フリルを描きたいとか、和服フリルは？だとか妄想が爆発した結果があの子です。

フレンチカンカンの衣装を参考にしたり、メリーポピンズの傘だよ！と言ってみたり。

そんな過程をふまえて若葉さんが仕上げてくれたのが前回の金お嬢だった。

謎のお嬢様無敵オーラがでている。

こんな子が盤上で王を守っていたり、敵を追い詰めたりしてるのだとしたら.....。

案外イメージ通りの強さなのかもしれない。

今度観戦するときは盤上のお嬢様に注目してみようと思う。

(文章：浮島イラスト：若葉)

次回の駒おむペンのテーマは「飛車」です。

縦横無尽に盤を無双する姿を考えていたら、こんなにもお姉さんなキャラが.....！

私たちはなぜ生まれ、どのように生き、そしてどこへ行くと言うのか.....。

次回もガンバルヨー！



登場人物

no
image

歩 Sharp Talon



桂馬 Knight Shoes



香車 Bard Lance



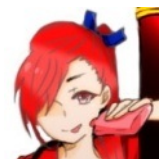
銀 Silver Sword



金 Gold Parasol



角 Slanting Sickle



飛車 Cross Hammer



将 Commander



天青 Underground Godendag

駒.zoneガールズ 序 「歩の手筋」

欠片食器

「やあっ！」

湖岸沿いの公園。朝日が照らす中、一人の少女が跳んでいた。

助走をつけて、ジャンプ。大きく伸ばした手は木の枝へと……でも、届かない。

「うーっ！」

着地して、口をとがらせる少女。再び距離を取り、助走。

結果は変わらなかった。

「なんでかなあ」

首をひねる。そして、木の枝を見上げた。背の高い人ならば届かない高さではないが、少女にとっては随分と高い。

「お姉さまなら簡単なのになあ」

くしゃくしゃ、と髪をかきむしる。

湖面はしーんとしている。木々も、街の全ても、じっと佇んでいた。

しかし、少女は振り返った。

「誰」

どこから現れたのかは、わからなかった。それでもそこには、一人の女性が立っていた。

「55地区の歩ね」

赤いロングスカートに赤白チェックのベスト。顔全体を覆うマスクをしていて、目しか見ることはできなかった。

「そうだよ。ていうか、まずはあなたが名乗りなさいよ」

「……そうね。私は林檎。明日、玉石を手に入れる者よ」

少女……歩は、さっと身構えた。山猫のような目つきになって、林檎と名乗った女性をにらみつける。長すぎる袖をまくって、拳をあらわにした。

「何地区の人か知らないけど、本番前に喧嘩売ってくるなんてちょっと腹立つ！」

「喧嘩？ 本気よ」

林檎の体が、浮いた。その一步は大きく、歩のものとは比べ物にならないほど大きく、あっという間に二人の距離は縮まった。

「な、なっ」

「遅い」

林檎の右膝が、歩の鳩尾を打ち抜いた。少女の体は崩れ落ちる。

「そして、もろい」

「ううっ」

林檎は次の一撃で仕留めようと、拳を振り上げた。……が、それが振り下ろされることはなかった。

「やめなさい」

更なる少女が、二人の目の前に現れた。セーラー服に黒いキャスケットを被ったその人は、両手で大きな鎌を抱えていた。

「街中で物騒なことね」

「本気なんでしょ」

「か……角ちゃん……」

角、と呼ばれた少女は鎌を握り直し、いつでも襲い掛かれるように構えた。その鎌は先端が複雑に加工されており、「角」という字に見えなくもない。

「あなたが角なのね。二人まとめて……と言いたいところだけど、さすがに難しそう」

「そうね。私、強いから」

林檎は嘆息を漏らすと、今度は後ろに跳んだ。角はそれを追わなかったし、歩はまだ立ち上がることもできずにいた。そして、林檎の姿は消えた。

「大丈夫？」

「ん、いや……えーと、大丈夫じゃない……」

「あのような輩もいる。気を付けないといけない」

「はい……」

辺りは、完全なる静寂を取り戻した。ただしそれも、つかの間のことに過ぎないのだが。

「桂馬、まだ寝てたのか。そろそろ起きないと」

「う、うーん。休日だよ……」

「何言ってるんだ。今日は大会じゃないか」

「ああ、そうかあ」

桂馬は、目をこすりながらのんびりと起き上った。

「ふああああああ。雨で中止にならないかなー」

「もう、何言ってるんだよ。僕だって行きたくないのに」

「だめだよ、お兄ちゃんしか、玉石を使えないんだから」

お兄ちゃんは、やれやれ、と首を振る。

二人の兄妹は、色々と文句を言いながらも出かける準備を始めた。兄はコーヒーの豆をひき、飲み物作る。妹はご飯にワサビとマヨネーズを入れ、おにぎりを作る。

「寒いからー、コートを着るよー」

桂馬は、歌いながら服を着る。寒いと言いながら、ミニスカートにニーソックスであった。そして緑のコートに、ふわふわの耳あて。

「またなんか中途半端だな」

「ズボンだとかっこ悪って、金ちゃんが、言うから」

「まあ、お嬢様は確にかっこつけてるな」

そういう兄は、セーターの上にジャンパーを着て、下もコールテンの長ズボンとばっちりな装備である。

「兄ちゃんは、ダサイなあ」

「ほっとけ」

ぼんやりとしていた桂馬だったが、玄関で靴を履く段になると目つきが厳しくなった。緑色の靴を、一所懸命に磨く。

「昨日のうちにやっとけよー」

「昨日もやったよー」

靴底も丁寧に磨く。ちなみに右足には「桂」、左足には「馬」という文字が書かれていた。

「どうかな、調子は」

「ばっちし」

靴を履いて、とんとん、とつま先でリズムをとる桂馬。少しだけ、口元が緩んだ。

「じゃあ、出かけようか」

「ほーい」

玄関を出ると、桂馬は飛び跳ねるようにして前に進んでいく。兄はその少し後を静かに歩く。

「ぶつかるぞ」

「だいじょうぶだー」

桂馬は二歩進んでは右、二歩進んでは左と、なかなかまっすぐ歩かない。兄は観ていて不安になるのだが、本人は鼻歌など歌っていたりする。

「あ、銀ころりんっ」

「えっ」

前方に人影を発見して、桂馬の足取りはさらに軽くなった。その一方兄の方は、動きが固くなった。名前を呼ばれて振り返った少女は、小さく手を振っていた。

「ぎーんこーろりーんっ」

「ころりんではないのよ、桂馬ちゃん」

「ぎ、銀ちゃんだ」

「あら、将さん」

「こ、こんにちは」

将さん、と呼ばれただけで将さんは視界が少し揺らいでいた。

少し説明しよう。銀ちゃんは黒髪の長い美少女で、チャームポイントは薄い縁のフレームの眼鏡である。背は高く、スタイルも抜群に良い。さらに将のクラスの学級委員長である。

それはもう、モテて当然である。

「こんにちは。いいタイミングだったみたいね」

「そうですね！」

「銀ころりん、一緒に行くぞー」

「はいはい、ころりんではないからね」

三人は横一列になって、街の中を歩いていく。道は全てまっすぐで、自動車は走っていない。昼間は歩行者専用なのである。そして、マンション三階の高さを走っているのが都市交通システム、サイドレールだ。この列車は車両の側面にも車輪がついており、両側の壁にあるレールに挟まれるようにして進んでいく。完全にゼロから計画されて造られた都市のため、路線も全て直線で、格子状にサイドレールは走っている。

「緑がいいなー、緑かわいいもんー」

エレベーターに乗り、三人はホームへ。乗車無料のため、改札もない。

「青も趣があると思うけれど。将さんはどう思う？」

「え、あ、もちろん青がいいよ」

「お兄ちゃんは流されやすいよねー」

ホームにやって来たのは、紫の車両だった。

「はずれー」

「残念ね」

「まあ、紫もいいじゃないか」

朝早いということもあり、乗客は少ない。桂馬は立ったまま窓の外の風景を眺めていて、そのために将と銀は隣り合って座ることになった。将の体は板のようにまっすぐになっている。

五区画進んだところで乗り換え。交差点の駅では、南北の路線が3、5階、東西の路線が2、5階を走っている。

今度の車両は黄色だった。

「あー」

「一番嫌いな色よ」

そこからさらに6区画。76地区、「プリンキピウム前」で三人は下車した。

「みんな来てるかなー」

「この時間なら、飛車ちゃんは確実にまだね」

三人は、駅からすぐ、大きなドーム型の建物に入っていった。それこそが「プリンキピウム」と呼ばれるものである。かつて人類が最初に降り立った場所と言われ、そこに格闘場が建てられているのだ。

入り口をくぐり三人が向かったのは施設内の控室。扉を開けると、そこには四人の女性がいた。

「おお、来たね！」

そう言ったのは小柄な少女、歩。

「待ち合わせ時間ぴったり」

セーラー服にキャスケット、角。

「幸福の量が少し増したようね。まだ一人遅刻の可能性が存在しているけれど」

赤いブラウスに緑のチェックのスカート、香車。

「今日は皆さま少し緊張なさっているようですね。私は確実に勝利いたしますので安心していてくださいませ」

金色の着物に金色の傘、金。

「ふふ、私も確実に勝利だー」

「油断してはいけないわよ」

「桂馬は肝心なところでやられること多いもんなあ」

「ひどいぞー」

このようにして、55地区のメンバーはいつものように揃った――いつものように、一人を除いて。

「テーサウルス・シュトライテ」それが、大会の名であった。何百年と続く伝統があり、何百年と同じ場所で、同じ報酬により行われていた。

チームは七人一组。対戦チームは事前に決められているが、対戦相手は当日の抽選によって決められる。

「今日の相手は一、25地区かー」

係員の前に並び、一人一人くじを引いていく。

「あっ、大将……」

歩が引いたくじには、「大」の文字が。

「あら、くじ運が大変良いのですね」

そう言う金が引いたのは「七」

「とほほ、だよ」

大将だからと言って責任が重いわけではないが、対戦場所が特別になる。中継カメラの入る、メインリングとなるのだ。

「歩ちゃんは初めてのメインか」

将が声をかける。彼は出場しないので、監督兼マネージャーの仕事をしている。

「は、はい」

「大丈夫、最近いい感じだし、いけるよ」

「ありがとうっ」

そして、六人目の銀がくじを引き終わったところで、大きなカツ、カツ、カツ、という足音が響き渡った。大柄な女性が、息を切らせながら皆の方に駆け寄ってくる。

「Was in time !!」

「姉さん、遅い」

銀が、少しにらんだ。

「でも、セーフだろ」

「ギリギリなのよね」

「勿論後で適正な謝罪の場を設けるから」

香車は穏やかな目つきだが、口元は歪んでいる。

「あー、Never mind !!」

最後の一人、大きな十字ハンマーを背負った飛車は、残り一つとなったくじを引いた。もちろん大将ではない。

「それでは、今日も頑張ろう」

将の掛け声に、七人が手を上げてこたえる。そして、それぞれのリングへと向かっていく。その中で、特に足取りの重いものが一人。歩である。

歩は七人の中で一番若く、一番成績が悪かった。しかも今日はメインリング、中継が入る。無様な試合をしたら、明日学校で何を言われることか。

廊下を抜け、扉を開ける。

歩の目前に現れたのは、青いマットの何の変哲もないリングだった。三列にロープが張られ、中には一人のおじさん、レフェリーがいる。ただし、それ以外には誰もいないのが異様だった。テーサウルス・シュトライトには、生で観戦する客はいないのである。そして関係者たちもモニターの向こうにいる。

「くじ運が良かったわ」

三人目の人間は、扉を開けるなりニヤリと笑った。

赤いロングスカートに赤白チェックのベスト。そして今度は、マスクはしていない。切れ長の瞳に高い鼻、そして薄い唇。

「お前はっ」

「林檎だ。今日はお姉さんには助けてもらえないぞ、お嬢ちゃん」

「だまし討ちを狙う奴に言われたくないっ」

レフェリーに促され、二人はリングに入った。

「武器を許可します」

その声で、二人は武器の覆いを取る。林檎の手には、とげの付いた球状の塊を有するメイス、通称「モルゲンステルン」が握られている。そして歩の右手には四本の鉄の爪が生えていた。「手甲爪」と呼ばれる鉤爪である。

「なに、それ。リーチも短いのに、どうやって攻撃するつもりなのよ」

「見ればわかるっ」

レフェリーによる二人のボディチェックが終わり、二人はコーナーに下がるよう促された。ゴングーのような音が鳴った。作り込まれた電子音である。

「きなよ」

「……」

林檎はモルゲンステインを構え、舌を出して笑った。歩は動かなかった。

しばらく、沈黙が続く。お互いに間合いを計っていた。ただし、林檎の方が気が短いのは、誰の目にも明白だった。

長い脚が踏み出され、モルゲンステインが振り下ろされる。歩は、それをじっと見ていた。

「そこっ」

歩はギリギリで身をかまし、しゃがみこんだ。そして手甲爪を纏った右手を、思い切り突き上げる。林檎もまた、ギリギリでそれをかました。

再び、にらみ合う。

今度は、歩が仕掛けた。体勢を低くして、一気に間合いに入り込む。林檎はカウンターで膝を繰り出す。しかし歩はそれを避けるどころか、その膝めがけて体を預けてきた。読んでいたのだ。

「なにを」

「《焦点の歩》っ」

歩の右足が、林檎の左足の膝を打つ。林檎はその場に崩れ落ちる。次に右手を振り下ろして仕留めにかかる歩だったが、林檎のモルゲンステインが何とかそれを防いだ。爪が柄に挟まり、歩の攻撃は届かない。

「惜しかった。残念ながら非力だね」

「まだまだっ、《継ぎ歩の手筋》っ」

歩の左足が、モルゲンステインの鉄球部分を踏み抜く。慌てて体をひねる林檎だったが、鉤爪が頬をえぐった。そして、鮮血が交差する。歩の足からも、血しぶきが上がっていた。

「痛いじゃないか！」

「うわたたたっ」

二人は再び距離をとる。歩は左足が地面に着いた瞬間体勢を崩しかけたが、何とか踏ん張った。

「もう少し……持ってっ」

もう一度、踏み込む歩。そして、モルゲンステインが振り下ろされる。歩は、左右に複雑なステップを踏んでそれを避けた。

「《ダンスの歩》っ」

まさに踊るような足つき。しかし、林檎はすぐに右膝を突きだしてきた。左足からよろめき、避ける余裕はない。歩は、鉤爪を林檎の脛に突き付けた。勢いは止まらず、後方に吹っ飛ばされる歩の体。しかし、林檎の足からも大量の血が流れていた。お互いに、立てない。

林檎はロープに手を伸ばし、なんとか這い上がろうとした。しかし、右足を引っ張られ、体を起こせなかった。歩が、必至に足首をつかんでいた。右手にはほとんど力が入らない様子で、ほとんどそえるだけだった。左手一本で、アキレス腱を締め上げる。

「ギブアップしてっ」

「これぐらいですか！」

林檎の足首と、歩の手首が悲鳴を上げていた。突き動かしたのは、初勝利への執念――

「どうわあっ」

歩は体を倒し、両足を林檎の足に絡ませた。膝十字に固めたのだ。そして右手の甲を、顎で押し込む。爪が、ふくらはぎにめり込む。

「痛いぞこの野郎！」

「だからギブアップ、しなさいっ」

レフェリーが林檎の顔を覗き込む。苦悶の表情に満ちているが、特定の言葉を漏らすことはなかった。血が滴り辺りを赤く染め、筋のきしむ音が響いた。ついにレフェリーが試合を止めよ

うと手を広げた、その時だった。

「さすが駒ガール、日々進歩している……昨日のうちに仕留めておくべきだった」

歩は最初、目前に突如として現れたそれが何であるかわからなかった。黒くて大きな、二枚のふわふわとした何か。

「え、ええっ」

歩の体から、力が抜けていった。

翼をもった林檎が、ゆっくりと立ち上がり、歩のことは見下ろす。

モルゲンステインが、先ほどまでとは比べ物にならない速さで振り下ろされた。

「勝負は決しているようよ、林檎さん」

身をかがめて、一撃を防ぐ少女。

「銀……ちゃんっ」

「初勝利おめでとう。でも、生きるためには油断は禁物よ」

「は、はいっ」

銀の刀が、モルゲンステインをはじく。

「そして、この方は何なのかしら。見たところ、ちょっとイレギュラーだけど」

「なんか、変身したというか……」

しばらくあっけにとられていたレフェリーが、あわててリングを下りた。歩は、よろよろと立ち上がる。

「残念ながら、こちらが私本来の姿。忌々しい人間の姿では戦いにくい」

「よくわからないけれど、戦いは終わったはず」

「いや、今始まったんだよ」

林檎が、銀に向かって一気に距離を詰める。再び刀で一撃を受け止めようとする銀だったが、予想以上のスピードに体勢が間に合わなかった。ぎりぎり伸びてきた刀は、放物線を描いて飛んで行った。

「しかし、すぐ終わりそうだ」

「こっちっ」

とどめを刺そうとモルゲンステインを振り上げた林檎を、歩の左拳が襲った。しかし、軽く身をひねってそれをかわす林檎。

「し返しだ」

腕をつかみ、ワキ固めに捕獲する林檎。容赦なく腕を締め上げる。

「痛いっ」

「私も痛かったよ」

銀が割って入ろうとするが、歩を突き飛ばした林檎の蹴りが、銀のこめかみを打つ。銀の体は崩れ落ちる。

「もろいな」

その時、林檎の胸から刃先が生えた。あまりにも素早かったので、貫かれた本人もしばらく気づかなかった。

「え？」

「私たちは、七人いるの」

背後にいるのは、黒いキャスケットの少女。

「またお前……」

「言ったはず、本気だと」

林檎の口から鮮血が漏れた。ゆっくりと鎌が抜かれ、林檎の体は支えを失った。

「角ちゃんっ」

「一つ、嘘を言った。七人のうち三人は戦闘不能」

「え、じゃあ……」

「歩のおかげで、チームは勝った」

歩と銀が立ちあがったところへ、陽気な声が聞こえてくる。

「あら、面白いことは終わってしまったのですわね」

金色のパラソルをくるくると回しながら近寄ってくるのは、金だ。

「面白くはないのよ」

銀の眉間にしわが寄っている。金は顔色を変えない。

「確かに、面白くない。こんなところまで来るなんて」

歩、銀、金が角の顔を凝視する。林檎の翼を見下ろす角の顔は、苦虫をかみつぶしたようだった。

「何か知っていらっしゃるのね。角ちゃんは特殊なことに物知りですものね」

「深いことと言って。これは、使い魔」

「「使い魔？」」

銀と負の声が重なった。金は相変わらず冷静だ。

「使い魔というからには、使う主がいらっしゃるということね」

「そう。駒ゾーンの外側にいる、悪魔たち」

角は、ゆっくりとリングを下りた。歩と銀も、首をひねりながらそれに続いた。

「なんだなんだ、神妙な顔して！」

大きな声が、控室に響き渡った。声の主である飛車は一番の大けがをしていて、ベッドに寝たままである。

「神妙な話なのよ、飛車ちゃん」

その横には、銀が付き添っている。本戦では無傷だったのだが、林檎との戦いで捻挫をしていた。テープをまいているが、あと数分もすれば完治するだろう。

「なんか空気が重いぞー、せっかく勝ったのにー」

桂馬は胸をざっくりと裂かれていた。傷はゆっくりと閉じているところだ。

「余程の事なんですね。厳正なる静寂が必要なようよ、桂馬ちゃん」

「げんせいってなんだー」

香車は首から肩を負傷していた。骨が陥没していたが、すでにかなり元の形に戻ってきている

。

「よし、できた」

将は、鉤爪を歩に渡す。メンテナンスされ、キレイになっている。

「おーっ！」

「玉石も使ったよ。これで全員の武器に使ったね」

「ついに、揃った」

角が、ぼそりつつぶやいた。皆が彼女の方を向く。

「説明してくれるね」

将のまなざしは、やわらかいが厳しかった。悲しんでいるようにも見える。

「もちろん。あの使い魔について……説明する」

角は、椅子から立ち上がって窓の方に歩み寄った。カーテンを開け、空を見上げる。

「駒ゾーンは、閉鎖された世界。私たちが出ていけないように、外からも入ってこれない。外の世界には、悪魔がいる」

予想されたとはいえ、想像しがたい存在についての説明に皆の表情が険しくなった。

「でも、例外もある。入ってくる方は、さっきみたいな。力の弱い使い魔が、人間に化けてくる」

「化けて……」

銀が、ため息のような言葉を漏らした。

「……そう、化けて。そして出ていく方は……玉石の力によって」

「やっぱり」

将は、小さく何度も頷く。

「正確に言うと、出ていくためには悪魔を倒さないといけない。そのための力が、玉石には、あるの」

「Hmm……。すぐにはよくわかんないけどさ、なんで角ちゃんはそんなこと知ってるんだよ」

向き直り、一度視線を落としてから、角は顎を挙げた。

「私は、戦ったことがあるから。別の駒ゾーンの、駒ガールズとして」

「なんか、さっぱり、わかんないー」

桂馬の間の抜けた声が響いたが、感想としては随分と正しいものだと皆は感じたのであった。

「ねえ歩ちゃん、あのようなこと信じられて？」

金と歩は、ふわふわのソファの上に座りながら紅茶を飲んでいて、金はこの部屋を「おじさんの休憩室」と呼んでいるが、表の札には「校長室」と書かれている。

「うーん、わかんない」

「それが当然の反応ですわ。駒ゾーンの外にも誰かがいるだとか、悪魔だとか、玉石がそれを傷つけられるだとか。でも、見てしまった以上ある程度は信用せざるを得ませんわね」

「そうだ、ね……」

歩は、昨日の光景を思い出していた。必死になってもぎ取ったはずの初勝利が、予想外の出来事によって無茶苦茶になってしまった。そして角の告白。外の世界がよくわからない歩には、角の存在自体が大きな謎になってしまった。

「でも、玉石を全員そろえたというのは吉報ですわ。しばらくテーサウルス・シュトライテもお休みできますし」

「うん。でも、ちょっとさびしいかも」

歩は右手で軽く素振りを繰り返す。やっと勝てたとはいえ、まだ一勝に過ぎない。チームに迷惑をかけてきた分、これからはどんどんと取り返したいのだ。

「おっ、やっぱりここにいたか」

ばたん、と乱暴に扉を開けて入室してきたのは、長身の女性だった。大きな十字架ハンマーを背負っている。

「あら、飛車さん、慌てている御様子ね」

「That's right. みんな呼び出された」

「どなたにかしら」

「まあ、平たく言えばだな、首相だ」

「ええっ」

「あらあら。それでどこに」

「なんか聞いたことのない場所だった。99地区だ」

「よくわかりませんけれども、行ってみるより仕方ないでしょうね。二巳に準備させますのでしばらくお待ちくださいませ」

金が手を叩くと、びしっとしたスーツを着た恰幅のいい初老の男性が音もなく表れた。

「お嬢様、いかがいたしましたか。早急のことと推測いたしますが」

言っていることは丁寧だが、あまりにも早口なので歩にはよく聞き取れなかった。飛車は最初から聞く気がない。

「そのようなのです。今日は帰りが遅くなるかもしれませんわ」

「了解いたしました。そのようにお伝えしておきます」

そして、音もなく去っていく二巳。いつもの事なので誰も驚かない。

「よし、何はともあれLet's go!」

その後金の準備が諸々あり、三十分ほどして三人は出発となった。

「そういえば他の方々はどうしているんですの？」

「帰宅途中のやつらはそれぞれ向かうって。角はすでに向こうにいるらしい」

「あら、授業に出ていないと思ったら」

サイドレールを乗り継ぎ、三人は南西の端、99地区へ。山が迫り、農園が広がり、運動施設、倉庫などが立ち並ぶ地区だった。

「Oh! なんともいえずのどかなところだなあ」

「そういえば何区画か先に別荘があった気がしますわ」

三人がしばらく歩くと、一台のバンが止まっていて、その前にスーツの男が立っていた。

「飛車さん、金さん、歩さんですね」

「そうですわ」

「お待ちしております。お乗りください」

「車、久しぶりだっ」

「おお、はしゃげはしゃげ」

駒ゾーンは公共交通が整備されているので、自家用車に乗る機会はあまりない。ちなみに金はリムジンで送迎されて登校しているが。

三人は後部座席に案内された。金が、「庶民の車は久しぶりですわ」と言おうとしてやめた。慎みもあるのである。

スーツの男がハンドルを握り、十分ほど走ると、道は細くなりくねくねと曲がり始めた。山へと入っていく。

「こんなところ初めてだっ」

「Me too. 山には近づくなって言われてるしなあ」

さらに二十分ほど走ると、車は高い崖の間の道を走り始めた。両側のがけは覆いかぶさるように道にせり出していて、ついには重なり合った。車は、自然のトンネルへと入っていったのである。

それからまた少し。ライトが、銀色の建物を照らし出した。山奥には似つかわしくない、町中にあるのと変わらぬ姿の四階建てのビルがあったのである。

「着きました」

「えっと……なんだこりゃ」

言いながら飛車は真っ先に車を下りて、トランクを開ける。愛用のハンマーがないと落ち着かないのである。

「うわっ、秘密基地みたい」

「その通りです。さあ、こちらへ」

男の案内で、三人は建物に入っていく。灯りはついていたが、扉はどれも閉められており、窓にもブラインドが下りていた。

「ここです」

そう言って男は、一番奥の部屋の前で立ち止まった。そして、右上のセンサーに向かって右手の人差し指をかざす。ピピッという音の後、扉は自動で開いた。

「あなたの指紋認証ということは、ここは案外日常的に使われているのですね」

「あまり詮索なさらない方が良くかと」

「わかりましたわ」

中は丸い大きなテーブルのある会議室になっており、すでに見知った顔の面々が着席していた。

「遅いぞー」

桂馬が立ちあがってピョンピョンと跳ねだした。

「ごめんっ」

「急に呼び出されたんだぜ、そうカリカリするなよ」

「時間に縛られるのは貧しい発想ですわ」

ネームプレートも用意されていて、三人は決められた席に着席した。そして、モニターには誰もが知る顔が映し出されていた。

「It is amazing! 本当だったのか」

「そう、本当なのですよみなさん」

スピーカーから聞こえる、重厚で透き通った声。

「お久しぶりですわ」

「ああ、そうですね、金さん」

彼は駒ゾーン首相、龍だった。すでに着席している面々も、ひととおり驚き済みなのである。

「全員そろったようですね。いや、呼び出して申し訳ない。皆さまが七つ目の玉石を手に入れ、そして目の前に鬼が現れた。この二つが意味することを、きちんと説明しなくてはならないと思いましてね。

まあ端的に言うと、あなた方にこの世界を救っていただきたいのです」

しばらく静寂が続いた。それぞれがそれぞれの感想を抱きながら、次の言葉を待っていた。

歩は思った。物語の主人公のようだ。平凡な人生が突如代わって数か月。更なる激流が、彼女を襲っているのだった。

七割未満(八)

清水らくは

俺はなんてだめな人間なのだろう。

帰り道、空を見上げて曇っている。月も星も見えない。

いろんな人に笑顔を向けた。初タイトルに挑む川崎さんに。初タイトルを獲った木田さんに。そして三段リーグに入ったつっこちゃんに。社交辞令ができるほど大人になって、そういうところは成長したのに、俺だけが何も無い。

この一年ほど、ずっとこんな感じだ。将棋界ではいろいろなことが起こるけれど、自分は蚊帳の外だった。勝率は七割。絶妙なほどに、いいところで三割負けている。

このまま普通の中年になって、成績が落ちていって、引退するだけの人生だろうか。

ドボルザークが鳴る。着信だ。

番号は、見知らぬものだった。

「はい、辻村です」

「ああ、辻村君か。栗本だ」

「……え、あっ、はい」

会長だった。今年代変わった、新会長だった。

「あー、あれだ。単刀直入に言うとね、電将戦、次君出て」

「はい？」

「最強ソフトと戦ってほしいんだ」

電将戦。プロと将棋ソフトによる戦い。

「あの、あれって引退棋士が……」

「元タイトルホルダーが二年連続で負けたんだよ。もう、現役棋士しかないだろう。ちなみに辻村君には先鋒をやってもらうから」

「え、あの……」

「まあ、今とは言わないから、早いうちに返事聞かせてね」

えらいことになってしまった。どうやら俺は、初めて強豪ソフトと公の場で戦う現役棋士の役を頼まれているらしい。つまり、初めてソフトに負けるかもしれない、そういう役を。

自宅に、見たことのないごつごつとしたパソコンが運び込まれてきた。中にはすでに対戦相手、「掟榎」がインストールされている。

「これ、もらえるのか」

「そういうことにしました。それぐらいしてもらわないと」

「将棋専用機ってとんでもないわね」

家には川崎さん、皆川さん、魚田君が来ている。若手代表として出る以上、みじめなことになるわけにはいかない。あと何人かに頼んで、「チーム辻村」を結成した。

掟塚は前回のソフト大会では五位だった。棋譜を何個か並べたところ、随分と攻めっ気が強いことが分かった。少々の無理攻めでも、終盤力で何とかしてしまう感じだ。中盤まで互角ではやばい、ということである。

「あ、木田さん着いたって」

川崎さんはメールを確認すると、部屋を出て行った。魚田君がパソコンのセッティングを続けている。なんでもオンラインゲームをするために専用機を組み上げるほどらしく、かなり詳しいようだ。将棋はどうしたと思わなくはないが。

「よし、そのままのまま」

「あ、天井ぶつかりそう」

川崎さんと木田さんは、長机を運び込んできた。会館でいつも使っているのと同じタイプだ。

「うわ、本当に持ってきたんだ」

皆川さんが目を丸くしている。たしかに、これはさすがに準備が良すぎる。

「初めてのことだし、できる限りのことをした方がいいだろ」

長机を盤の横に置き、向こう側に木田さんと皆川さんが座った。そして盤を挟んで俺と魚田君。パソコンの前には川崎さん。本番の時もだいたいこんな感じになると予想されているフォーメーションだ。

「持ち時間は四時間だったな。じゃあ、やろう」

本番で使うであろうものはだいたい揃えて、対局は始まった。

目の前に人間がいて、盤駒がある。いつもと変わらない気持ちで、対局することができた。ただ、違和感がないわけではない。ファミリアは、俺に対して一切敵対心を見せていない。綺麗な手つきで、駒を動かしていく。俺の感情の一部が、迷子になる。駒が、別世界からやってくるような錯覚を感じる。

当日は、ずっと中継される。そればかりは今日と環境が違う……と思ったら、三脚が建てられ、デジカメがこちらを向いていた。川崎さんは、妙なところでとても張り切るということを知った。

戦型は相矢倉。よくある形なので、まだ相手がソフトだからどうこうということはない。と、ドアホンが鳴り、川崎さんが席を立つ。入ってきたのは三東先生だった。聞いていなかったのので、しばらく視線が固まってしまった。

「えー……なんだっけ、ああそうそう。立会人の三東です。十二時になりましたので昼食休憩に入ります」

もうこの人たちは、このイベントを楽しんでいるに違いない。少なくとも歴史に残る心配は、今のところない人たちだ。タイトル戦に出るわけではないが、勝率のいい若手。われながら先陣を切るにはふさわしい人間だと思う。奨励会員、女流棋士、タイトル挑戦した若手、そして弱いプロ。みんな、今回は安心して外側から見ていられるのだ。

さらにドアホンが鳴って、出前が届いた。

「鰻だぞ。別のが良かったか？」

「本番では寿司も食う」

そういえば朝、2千円徴収されていたのだった。本番ではスポンサー持ちと聞いたので、がっつりと食べてやる、となかばヤケクソ気味に思った。

ちなみに、うなぎは美味しかった。

午後一時、対局再開。この時間帯が一番危ないのではないか、と思っている。パソコンと違って人間には眠気が訪れるし、流れが一度中断されていることにより迷いが生じたり、逆に決断がよくなりすぎたりする。

慎重に。そして、時間を使いすぎないように。できる限り普通に進めていくことを心掛けた。しかし中盤、掟稼の方が意外な一手を放ってきた。昔一時期、局地的に流行った手だ。定家さんが先手で勝って以来現れなくなったけれど、結論が出たとまでは言えない。ただ、後手としては具体的な主張がなく、選びにくい手とされている。

こんなにはっきりと覚えているのは、研究会で出てきたからだ。せっきーは知らずに指したらしかったが、その時は面白い手だと思った。それから過去の棋譜を検索したりして、皆でああでもないこうでもないと言ったのを覚えている。ただ俺は、「本番では出てこないよねー」とも言った。

ソフトがどこまでの情報を知っていて、この手を選んだのかはわからない。定跡というものを知らなくて、この局面で考えた結果このでいいと判断しているとすれば、とても興味深いことである。

あの時の記憶をたどる。先手が悪くなる道理はない、とはいえ難解、だった気がする。

数手は、研究した時に出てきた手順をなぞっていた。しかし掟稼は、突然過激に攻めてきた。たしかに後手玉には爪路はかからなさそうだが、だからと言ってここで受けないというのは流れ的におかしい。ソフトには流れなどという感覚はないのだろうけど。

「辻村六段、持ち時間を使い切りました。これより一手六十秒未満でお願いします」

突然の、皆川さんの声。もうそんなに時間が経っていたとは。

感覚的には、こちらがいい。けれども答えを見つけられるかは自信がなかった。詰む詰まないにしてしまっただけは、駄目なのだ。耳の後ろを、冷たい感覚が走り抜ける。

どこかで覚悟していた。60秒は、とても短い。今日に限っては、相対的な問題だ。

後手からの攻めが厳しくなってくる。掟稼は、焦らない。

ソフトは、強いのだ。

「負けました」

頭を下げた。ファミリアが申し訳なさそうな顔をしている。

「辻村、いけるんじゃないか」

ただ一人、川崎さんだけが頷いていた。

「え」

「今の終盤、時間があれば先手がいい。研究しよう」

これが強さなのだろうか。一日で二回負けた気分だったけれど、今以上負けたいためにはここで逃げ出すわけにはいかない。

「はい。たしかに、手応えはありました」

「あの……休憩しよう」

そう言ったのは木田さんだった。彼女が言え、川崎さんも従うとしたものである。皆川さんもファミリアも、ほっとした様子だった。

「まあ、それもそうだな」

窓の外は、すでに暗くなっている。本当に、人間の時間はすぐに経過するものである。

世間ではかなり大きなニュースになっているらしいけれど、俺にとってはそんなことは関係なかった。指せば指すほど、この戦いの難しさを実感することになる。

掟は、いつも同じ手を指してくるわけではない。ただ、矢倉のあの局面にすれば、必ずあの手を指してくるのだ。

本番、どうなるかはわからない。けれどもこの指定局面だけは、どうしても答えを出さなければならなかった。

いつも皆が集まれるとは限らない。今俺の部屋には、皆川さんがいる。あとは、夕方からせっきーが来る予定だった。

「この局面が詰めるなら、相手は避けるんじゃない」

「でも、詰める逃れがないわけじゃないですし」

研究していても、煮詰まってしまうことがある。本番までにはソフトもグレードアップしてくるだろうし、必ずうちのものと同じ指し手を選ぶわけではない。だから、あくまで最善手を探さなければならない。そうすると、まだまだ見えていないものを探すことになる。

「あのさ、辻村」

「なんですか」

「いいの、毎日こんなので」

「え」

盤を挟んで向こう側、皆川さんはきょろきょろと部屋を見回している。

「この部屋には来ないの？」

「ああ……別れました」

「……そうなの」

この二年間。同世代の皆は将棋のことでいろいろとあったわけだけれど、俺には俺で、人生初のことがあった。

「皆川さんはどうなんですか。あの、囲碁の人」

「プロポーズされたよ」

「え」

皆川さんのウェーブした髪が、ふらりふらりと揺れている。

「今度の新人戦で優勝したら、結婚してくださいって。ちゃんと付き合ってもないのにね」

なんだかよくわからなくて、ずっと視線を外せなかった。身近にいた姉弟子のことを、実は何も知らなかったんじゃないかと思い始めた。

「それで、どう答えたんですか」

「興味ある？」

「ありますよ。すごい話だから」

「断った」

「なんで」

「好きな人じゃないから」

胸に、ずしりと重たいものがぶつけられるようだった。俺は、言われたのだ。「みっちゃん
はさ、結局私のこと好きとかじゃなかったんだね」と。

嫌いではないし、一緒にいて楽しいし、でもそれだけじゃ続かないし……恋愛は将棋よりも難
解なゲームだ。

「それで相手は納得したんですか」

「どうだろう。まあ、碁もしつこいらしいけど」

「ははは」

二人は誕生日が一緒で、沖縄で偶然会ったと聞いていた。そんなロマンチックな条件があっ
ても、現実はずんわりとはいかないものなのだ。

「辻村はさ、電将戦、どんな気持ちで頑張るわけ」

「……そうですね、踏み台というか、自分をふるいにかけるというか……」

「ふるい？」

「この先、上を目指せるかどうかのふるいです」

理由はわからないけれど皆川さんが微笑んだので、少しほっとした。恋人とはうまくいかなく
ても、将棋の仲間とはずっとうまくいっている。多分、みんなそこそこ変人だからだ。

「辻村は、やっぱり強いよ」

「もっと強くなりたいんですよ」

「まったく、生意気だなあ」

そのとき、ふと見下ろした盤の上に、一筋の光が見えた。カーテンの隙間から、一直線に伸び
ている。頭の中に、閃くものがあつた。その線に沿って、飛車をスライドさせた。攻めに使うも
のと決めていた飛車が、縦横の守りに利いている。攻防の手というわけではないし、攻められる
前に動くのは違和感がある。ただ、悪手であるという感覚が全くない。

「どうでしょう」

「……すぐには、わからない」

「ちょっと、考えてみます」

決め手になるんじゃないか、そんな直感があつた。

その会場は、まるで将棋とは無関係に見えた。華やかな電飾に大きなスクリーン。コメントが床から壁、天井へと流れていく。

今回の電将戦では、ソフトの実力ができる限り出されることが重視された。そのためには何はともあれ電力が必要ということで、会館の外での対局となったのである。

解説が行われる一階の会場とは違い、対局室がある三階は普通の空間だった。ただ、今回のために一区画が和室にされている。

中に入ってしまうと、いつもと何も変わりはない。たしかにカメラがあって、目の前には奨励会員が座っている。けれども、それはそんなに特別なことじゃない。

パソコンのスペックは練習と同じだが、ソフトのバージョンと使用電力は異なっている。それがどんな影響を与えるのかは今のところ分からない。

「スーツなんだな」

会長が顔をのぞかせた。実は、和服を勧められたのだ。

「僕も、これで最高のスペックです」

「ほほー」

いつも通り、というわけではない。今日のために新調したのだ。対局料の半分は飛ぶ金額だった。

一階では、皆川さんが聞き手をしている。この二か月間ほど、姉弟子にはとてもお世話になった。彼女だけでなく、みんな本当に良く協力してくれた。それは多分俺の人望とかそんなことではなくて、俺がまだ強くなれると信じてくれたからだ。自分の能力を十分に生かし切れていないことが、いろいろな人に見透かされているんだと思う。

現役の棋士として最初に負けるわけにはいかない。そして、上を目指す人間として、こんなところで負けるわけにもいかない。

時間が来た。いつものように、一礼をする。

いつものように、淡々と時間が過ぎていくのがわかる。システム的なことはわからないが、当たり前の手も数分経ってから応手がある。掟稼は、人間に近いリズムを持っている。

そして。矢倉に。

予感があった。

基本的に、ソフトは序盤が少し苦手だ。詳しく記憶することはできるけれど、その意味を知ることはいない。そして深く読むことはできるけれど、広く読むことはできない。だから、決まった道があるならばそちらを進みたいのではないかと考えている。お互いが了承さえすれば、最も互角であろう道を、共に進んでいくのだ。

気が付くと、お昼になっていた。

昼食は、ソバにおにぎりを頼んであった。色々と試したものの、食べ慣れないものは体に負担をかけてしまうようだった。

静かだった。多くの人が来ているにもかかわらず、勝負の場はいつもと変わりがなかった。ただ、相手の息遣いは聞こえてこない。

色々な人が、色々な思いで観ていることは知っている。人類とコンピューターの戦いがどうと

かこうとか、そういうのは今の自分にはピンとこない。なぜならば俺たちはいつでも、自分だけを背負って戦っているからだ。世代も出身地域も門下も、だいたい後付で言われるにすぎない。俺は俺で、敵は敵だ。

対局が再開されて、淡々と指し手は紡がれていく。そして当然のように、例の局面になった。もはやこれは、掟稼の個性だ。この手が好きなのだと思う。

異様に落ち着いていた。

研究通りに、まったくその通りに進んでいく。そして俺は、ずっと飛車を動かした。記録係が、時計係が、そして目の前の奨励会員が息をのむ音が聞こえた。指してから、一分もかけずに着手したことに気付いた。戸惑いも焦りも、何もなかった。

これで、相手の手が難しいはずだった。一つ息を吐いて、相手の手を待った。

十分たっても、動きはない。二十分たっても、指されない。ソフトも読み担い手を指されると、少し心を休めて、気持ちを落ち着かせたりするのだろうか。

三十分が経とうかというときだった。右端に、ずっと手が伸びてきた。

1三步。

しばらく、その場所をじっと見つめていた。一分たりとも考えていない手だった。先手は一筋を詰めており、1四には歩がいる。こんなところに歩を進めてくるなんて、今まで見たことがない。そう、今まで見たことないことを考えられるのが、ソフトの強みなのだ。

意味を、考える。同歩成りには、同玉だろう。端から逃げ出せることで、可能性が広がる。そして、その可能性の全てを読むのは、ソフトの得意分野だ。

時間が欲しい。何日もの時間が欲しかった。しかし実際にはほとんど時間がない。その中で読まなければならない。読みを、捨てなければならない。

いい手とは思えなかった。この瞬間は、指す前よりも形が悪いのだ。例えば放置して後手が1四歩ならば、先手から1二歩のたたきなどが生じる。

考えはまとまらなかった。けれども、攻めていい時間だと思った。ここで決断しないと、差をつけられずに終盤に入ってしまう。幸いここまで研究通りだったおかげで、頭の燃料はまだそれほど使っていない。

見えた。それは、定家さんがよく駒を打つことから、「定家ゾーン」と呼ばれているスペース。俺は銀をつまみ、8三の地点に置いた。相手の駒を責めて、玉頭を開拓する。逃げた飛車を狙わないならば、点数でも負けることはない。

流れは確実にこちらのものになった。相手の玉には触れない方針で、一步ずつ前進していく。領地を広げていくのだ。ソフトはこういう時、方針を見失いやすい。入玉に対する考え方が、まだ洗練されていないのだ。かと言って最初から入玉を狙うのはまずい。なぜならば、玉を攻めることに関してはもはやプロと遜色ないのだから、局面が進んでいないうちには玉を攻めるために玉の周囲も攻略してくる。城が崩れてきたあたりが、一番狙い目だと思っている。

掟稼は、もはやどうしていいかわからないといった様子だった。駒損を避けるため右往左往している。もし相入玉を目指すならば、あやもあつただろう。

思想だ。君に足りないのは、思想なのだ。

そしてそれは、自分にも当てはまる。強くなりたいと願うばかりで、何をどう表現したいかを考えてこなかった。努力や才能だけでは、勝負は決まらない。強い思いとか、こだわりとか、そういうものが導いてくれるものがある。

川崎さんにも、木田さんにも、そしてつっこちゃんにも思想がある。共に過ごしていく中で、それがわかってきた。あの三東先生ですら、最近は勝率が良くなってきている。確実に前より強くなっているのだ。

ソフトには、勝つべき理由がない。だから、自分より強い相手には勝てない。

入玉が確定した。それでも掟榦には相入玉の意志がない、というかそういう入力がされていないのか、ひたすら攻めを続けてくる。動けば動くほど、苦しくなっていくのだ。ついにはどうしようもなくなり、歩を垂らした。反撃には十分すぎるほどの駒を貰っている。

プロの対局では、これほどの差になることはまれだ。それでも、ここに至るまではギリギリの攻防があったのだ。対局前にも、二人は戦っていた。

最後、三手詰みになるまで対局は続いた。気持ちは、ほとんど動かなかった。

対局室に誰かが入ってきて、光がまっすぐ、盤を横切っていった。

華やかな場所に戻り、インタビューが続く。こういうのはやっぱり苦手だ。

「プロ側にソフトが提供されることに関して不公平ではないかとの意見もありますが、辻村六段はどのようにお考えですか」

場の温度が、少し下がるような質問が飛んできた。ただ、予想の範囲内だ。

「人間とコンピューターの間にある最大の不公平は時間です。読みの深さは人間に少し分があると思っていますが、量に関しては圧倒的な差です。同じだけの量を読むのにかかる時間が違う、それは人間とソフトとでは別の時間を生きているとも言えると思います。その差を埋めるには、人間が事前に時間をかけるしかないと思います。ソフトは何億手も読むと言われていますが、もしプロも何億手読む時間があれば、プロ棋士側が圧勝すると思います。ソフトに量的なアドバンテージがあるのならば、人間側に時間的なアドバンテージが与えられてしかるべきと考えています」

質問した記者は何かを言おうとして、言葉を飲み込んだようだった。記者というのは自らの想像したストーリーに適さない応答に対しては不機嫌になるものだと、最近学んだ。

ちなみに、俺の答えは皆に考えてもらったものである。インタビューも研究済みだった。

俺の祭りは終わっていく。そして、日常の戦いは、普通に続いていくのである。

二か月がたち、状況は大きく変わった。電将戦はプロの一勝三敗一引き分け。つまり、俺以外誰も勝てなかった。

引き分けというのも変だけれど、イベントの性質上持将棋のあと指し直しというのは難しかったから仕方がない。あとは、皆負けた。驚いた。それだけ上位のソフトが強かったということだ

ろう。

正直なところ、どう受け止めていいのかよくわからない。もしソフトが人間より強くなったとしても、それに勝つために努力したいと思うだろうか。

ただ、強さというのは測りにくいものだ。インタビューでも言ったけれど、時間が十分にあればプロが有利だ。早指しならば全くかなわないかもしれない。ルールによって結果はまったく異なるだろう。だから、根本的に「将棋が強い」なんてことは、どうやって測ればいいのか、いつまでたってもよくわからないままだろう。

多分、俺のところに再び話があることはない。役目は終わった。

最近、別の役目が増えている。それは、つっこちゃんを守る、というものだった。三段リーグに入り、にわかに注目を集めるようになったつっこちゃんは、一般のマスコミからも取材されるようになった。けれども、彼女はそういうことが大の苦手なのだ。だから三東先生などと相談して、できるだけ周りの人間が話をして、彼女には負担がかからないようにしよう、ということになった。俺は「研究会のパートナーとして」色々なところで話をする機会が増えた。

電将戦で唯一勝った棋士と研究会をしていた、というのはストーリー的には大変使いやすいらしいけれど、実際には俺の果たした役割なんてちっちゃいものである。一番偉大なのは三東先生だし、同世代のせっきーやファミリアの存在も大きいし、俺なんておまけみたいなものだ。何より事態はそんな悠長なものではなくて、つっこちゃんは確実に将来ライバルになる存在なのだ。

そして今日は、それが現実になる日かもしれないのだ。三段リーグ最終日。つっこちゃんには、昇級の目がある。

「やっぱり来ていたんですね」

控室に入ってきたのは、三東先生だ。この瞬間、世界で最も緊張している人間ではないか。

「そりゃあね」

「行けそうじゃないですか」

「そんなにすんなりとは、普通いかないよ」

そうは言うけれど、選ばれし人間というのは運をも味方につけるものだ。まったく無名で、古い全集だけで勉強していた少女は、自転車で東京までやって来た。師匠と出会い、俺らと出会い、強くなって、この日を迎えた。女性初の四段と言うけれど、そんなのは彼女にとっては通過点だろう。

一局目は候補の三人が皆勝った。つっこちゃんは三番手で、上二人が負けられない限り昇段はない。ただ、最終日に自力の二人が確実に逃げ切るなんてことはそんなにはないのだ。

待ち時間はとても長かった。そしてついに、一番手が勝ったとの知らせが来た。これで、二番手になれるかの勝負。競争相手が負けて、つっこちゃんが勝てば昇段だ。

三東先生がいよいよそわそわして、泣き出しそうな顔になっていた。俺は思わず、声をかける。

「つっこちゃんは、そういう星の下に生まれてきた気がします」

「え」

検討の手を止めて、俺は王将をつまみ上げた。それを見ながら、話を続ける。

「将棋界のことなんて知らずに飛び込んできて、三東さんのところにたまたま行って。それでこんなに早く駆け上がってきて。全然強そうに見えないし、弱気だし、内気だし。でも、勝っちゃうんですよ、彼女はいつも」

そして、第二報が入った。金本勝ち。これで、相手次第。

五分が経ち、十分が経ち。時間が渋滞してるんじゃないかと思った。二十分が経過した。

第三報が、ようやく来た。競争相手が……負けた。

俺らはすぐには感情を表現できなかったけれど、将棋の事なんてよく知らないと言っていた記者が三東先生の方を叩いた。

「よかったですね」

「え……ええ」

俺も、この偉大な師匠を称えないわけにはいかない。

「三東さん……やりましたね」

「辻村君……やっちゃったね」

ぎこちないけれど、師匠は笑っていた。俺自身も多分、珍しいぐらいの笑顔だろうと思う。

「……あのさ、辻村はさ、きっと映画だとかは嫌いだよね」

今日は、つっこちゃんの昇段祝賀会があった。今はその帰り道、皆川さんと二人駅まで歩いていた。少し前を歩く皆川さんが、振り向かないままに話しかけてくる。

「え、何ですか」

「べつに誰とでもいいんだけどね、観に行きたい映画があって、みんな都合が悪いらしくて、まあ辻村とでもいいかなとか思って」

「いいですよ」

「え」

「行きたいです」

「ちょっと、なんで乗り気なのよ」

「映画とか自分では行かないから。たまにはいいなーと思って」

「じゃあ、そのついでに買い物とかご飯とかもせっかくだからする？」

「いいと思います」

「……そう」

皆川さんが一瞬振り返ったので、二人は横に並んだ。そういえば昔、二人で服を買いに行ったことがあった。あの頃もこんな感じだったけれど、随分と変わったような気もする。

思えばいつの間にか、誰かといることが普通になっていた。学校の友達なんて誰もいないのに、いろんな人と関わって、共に過ごして、付き合ったり別れたりして。そしてずっと変わらないのは、皆川さんはいつでも俺の味方で、そのことに俺も安心しているということだった。

七割以上の確率で、ずっとそんな関係は続いていくと思う。

「皆川さん、もし僕が名人をとったら……」

「えっ」

「欲しい帽子があるんで買ってください」

「ばか。辻村のばーか」

また、皆川さんが半歩前に出る。揺れる髪を、しばらく眺めていた。

完

あとがき

清水らくは

ええと……

「七割未満」、いかがでしたでしょうか。

『五割一分』と『レイピアペンダント』という二つの小説を下敷きに、タイムリーな話題なども取り入れて書いてきましたが、何となくまとまりのない話になってしまいました。「とりあえず辻村君を主人公にしたい！」という思いから書き始めたので、どんなストーリーになるかとか考えていなかったんですよ。

それでもこの話があるおかげで、「『駒.zone』に最低一作はある！」という妙な安心感もありました。短編も一作は書こう、と思っていたのですが、正直そちらはアイデアが浮かぶか次第なのです。

他の作品を書いていた時もそうなのですが、プロの世界を知らないためにいろいろと想像して書かなければならない点があり大変でした。それでも最近はいろいろなメディアからプロの世界を覗き見ることができ、非常に書きやすくなったという実感もあります。あくまで私が書くのは「架空のプロ棋士たちの世界」ですが、そこから本当のプロの世界に興味を持ってもらえたりしたら大変うれしいです。

「七割未満」はここで終わりですが、登場人物たちのことは大好きなのでまだまだ彼らのことを書いてあげたいと思っています。特に沖原さんは皆に好きになってもらえるまでしつこく書いてあげなきゃと思っています(笑)

月子さんがプロ棋士になるところでこの物語は終わりますが、女性四段誕生の話は近い将来フィクションではなくなるかもしれません。これからも「現実になったらいいなと思うフィクション」を書いていこうと思いますので、応援していただくと大変幸せです。

多くの読者と共に、表紙にキャラクターたちを書いて下さったまるべけさんにも大変感謝しています。月子さんや皆川さんの顔が見えてくることにより、登場人物たちが私の中でより生き生きと動き始めたと思います。

それでは、次号以降の物語もぜひよろしく願いいたします。



Thank You !

駒.zoneのエクストリーム詰将棋という企画を突におもしろく拝見していました。第3弾が出ていないのは誠に残念なことで、私も後に続こうかと思いましたが断念しました。というのも、個人的には授業中に詰将棋を作ることが多く、ある意味ではエクストリームな状況なのかもしれませんが、写真を撮るわけにもいきませんし、本誌の趣旨に沿った記事にはならないと思われたからです。

ただ、エクストリーム詰将棋のおもしろい点は、ただ特殊な状況で詰将棋を作ることのおもしろさのみあるのではなく、作図する方の実況中継であるという点にもあると思います。そのような試みは詰将棋界においても決して多くありません。そこで今回、過去の作品で恐縮ですが、作図していたときの思考過程に立ち返ってご説明してみたいと思います。これが詰将棋に興味ある方にとってはある種の創作講座のようになれば幸いです。また、そうでない方にも、詰将棋というのはこのような過程で作られているのかと軽い気持ちで読んでいただければと思います。

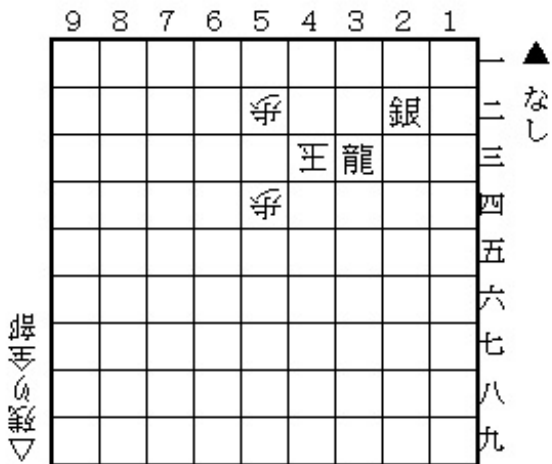
私は詰将棋を作る際、十中八九、逆算で作ります。それも最後の最後、すでに詰んでいる局面から作ることが多いです。そこから少しずつ手順を戻していき、その中で詰将棋らしい手順を加えることを目指しています。

その際、心がけていることは一言で言って「駒を増やさないこと」です。この「駒が増える」には捨て駒で消える駒はカウントしていません。最後の詰上がりまで残り、かつ詰上がりに関係のない駒はできるかぎり少なくしたい、ということです。もちろんほとんどの場合、詰上がりに関係ない駒を一枚も残さないのは無理です。そこで補助的な指針として、①一つの駒にできるだけ多くの機能、役割を持たせる、②駒数が増えそうときは最後の最後まで抵抗する、③どうしても増えるときはその駒に複数の役割を与えられるようになるまで内容を充実させる、ということをつねに気に留めるようにしています。

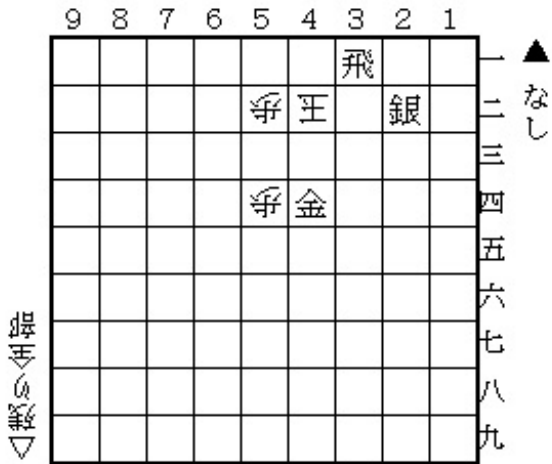
技術的にはそのような指針を心がけた上で、感覚的な指針としては「ふわふわさせておいてきゅっと捕まえる」ことを目指しています。一つの素材には、かなりの発展の可能性が秘められています。多くの可能性がもやもや漂っていることに意識的になって、むやみに可能性を狭めずさまざまな展開を模索します。一つの図を見ているときにも、頭の中では各部分を変更可能なものとみなし、ベストな組み合わせを探すのです。したがって盤上の配置はこころろ変わります。一路動かしてみたり、左右反転させてみたりもします。そうした努力の中で、ふわふわ漂っていた可能性の雲のなかから、どうやら一つ核になるものが取り出せそうな気がしてきます。それをきゅ

っと捕まえるのです。

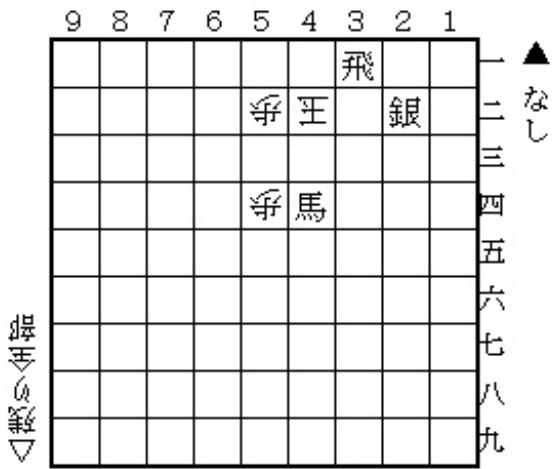
具体的に見ていきましょう。



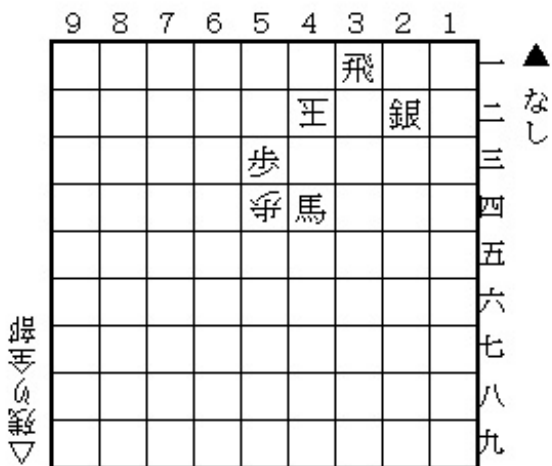
あるとき、こういう詰上がりをやりたいくなりました。どうでもいい配置をとりあえず歩にしています。詰将棋の華は捨て駒ということで、捨て駒を入れてみましょう。



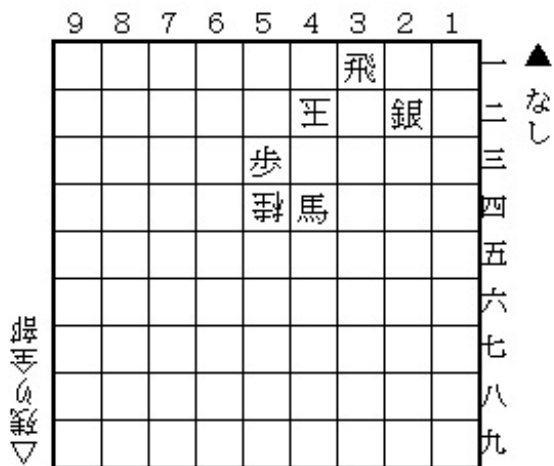
43金、同玉、33飛成までです。この図自体は、もうほとんど逆算不可能です。▲31飛と打つ手が入りそうにも思えますが、飛車を持ち駒にしておくと、▲21飛△42玉▲31飛成までで詰んでしまいます。まあこの図はまだ固定していない図なので、そんなことはあとでまた考えましょう。それよりも22銀と44金の関係について思いをめぐらせませう。44金が仮に馬だったら、将来22銀と打つ手まで入りそうではありませんか？ なにより捨てる駒は大駒のほうが、感触がいいです。というわけで次図。



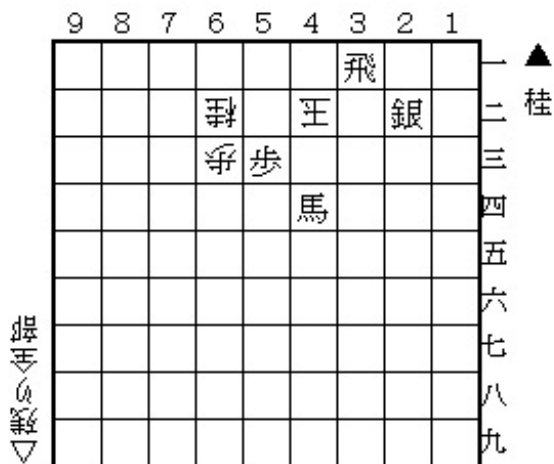
これで44馬を司令塔として、この図に至るまでの攻め駒配置を組み立てられる気配が漂ってきました。もちろんこの図ではまだぜんぜんだめですが、この段階では気配があればいいのです。さて、この図を見ながらまたつらつらと考えます。52歩と54歩で表している配置は詰上がりの際、玉の移動範囲を制限する駒です。このように、玉の移動可能性を狭めるための配置を私は「枠」と呼んでいます。詰将棋には枠になる駒とその枠の中で運動する駒とがあります。私の好みでは、枠は少なければ少ないほどいい。あるいは、枠になっている配置が、ある時点ではアクティブな駒であってほしいと思います。そこで次のような枠の取り方を試してみます。



どこかで▲53歩△42玉と馬の利きを生かしながら枠を設定することができそうな気配がしますね。このように動きの中で枠を設定できると、詰上がりの意外感が増します。さて、▲53歩が入るためには、62と63に新たな枠を設定する必要が生じるようです。枠を減らすための逆算で結果的に枠が増えてはつきりません。節約する方法を考えましょう。今54に枠の駒があるわけですが、これが桂だったらどうでしょう？



狙いはこうです。▲53歩を打つ時点では62の枠として桂を使います。そして△42玉を待ってから▲54桂と捨てます。これを△同桂とさせることで、同じ駒を54の枠として再活用することができるのです。これがうまくいけば、54の枠も一度動かすことができるし、捨て駒も増えます。この実現のためには、いくつかクリアしなければいけない壁があります。まずは桂を持ち駒に加えることとなりますので、余詰の筋が多くなります。とりあえず次図を見てみましょう。



63の枠はどうも動かしようがなさそうですので、無難な玉方歩にしました。さて、この図では▲34桂で一手詰になってしまいます。これを消すこと自体は簡単です。たとえば、玉方35とを加えればいい。しかし、余詰消しのためだけの駒を置いてはつまりません。どうしても余詰消しの配置を置かなければならないのであれば、その駒になにか別の意味ももたせてやりたい。そこでまた、図面とにらめっこしながら考えてみます。少し思考を整理してみましょう。キーになるのは以下の2点です。

- ①この図は将来▲53歩と打つ逆算を加えるつもりであること。
- ②さきほど少し考えてみたように、飛車が21などから31飛成と成れる形だと早く詰んでしまうこと。

この二点を組み合わせることで、少し面白い狙いが入られるようです。つまり、上図の2手前、▲53歩を打つ瞬間に、もし31の駒が龍であったら、打歩詰で反則になりますね。したがって、次のような手順が構成できる可能性があるわけです。

- 一、攻方は31飛成とする余地を残して、21飛など遠くから飛車を打つ。
- 二、玉方は31に飛を成れる余地を残したくないので、一度31に捨て合いをして成るのか成らないのか態度を決めてもらう。
- 三、成ってしまうと53歩が打歩詰で打てないので、31には飛車不成で進めるしかない。
- 四、上図に合流する。

これができるれば、捨て合いに飛車不成と、詰将棋らしい要素が豊富な手順になりますね。このあたりで本作の形がひとつ見えてきました。最初に考えた素材から、だいたいこのような手順の可能性はある、ということに気づけば、創作の創の部分終了と言っていいでしょう。あとは作の部分、全体を成立させる作業を残すのみです。

さて、上の発展を目指すことによって、34桂の余詰を消すための配置にもうひと働きさせられる可能性が出てきたことも重要です。たとえばこうします。

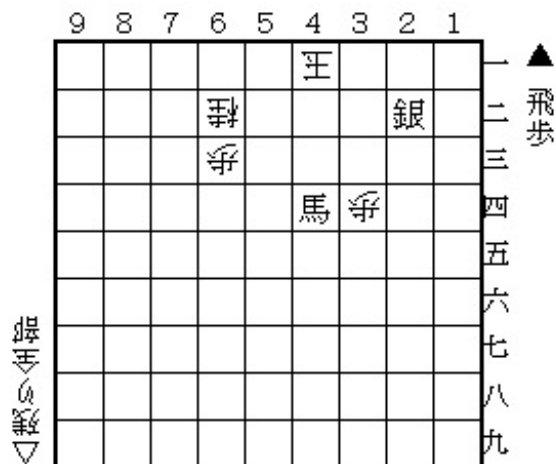


玉方34歩を加えることで、桂を打つスペースをあらかじめ埋めてしまうという消し方なわけですが、これによって玉方が△31歩と受ける可能性も消している点に注意してください。先ほど、31で捨て合いをすることを狙いの一つにしました。そこから上の図に合流するとなれば、その捨て合いは桂でなければならないわけです。しかし△31歩と受けられてしまうと上の図になりません。それでもその局面（上図から持ち駒を桂→歩に変えた局面）が今狙っている手順よりも早く詰めばいいのですが、その局面は早く詰むどころか不詰。したがって△31歩の可能性を消しておく必要があったのです。そこでこの34歩配置です。これによって▲34桂の余詰を消すだけでなく、二歩禁によって合駒を桂に限定させる役割も果たすことになり、比較的効率のいい配置といえます。

さて、先ほどこの余詰は35とくらいで消せるといいました。しかし、それでは余詰消しがただそれだけの駒になってしまいます。それはいやだ、この配置にもう少し機能を持たせてみたい、とあがくことによって、このように展開を深めることができました。今やこの余詰消しは作品前半の展開をつくる重要な配置へと昇格を果たしました。創作初心者の方が余詰にぶつかると、とに

かくそれが消えればいいと安易に駒を置きがちです。しかし、本当にそれでいいのかはつねに考えて欲しいと思います。私は創作を始めたばかりのころ、ある先輩作家から、余詰が出るのは喜ぶべきことなのだ、と教わりました。というのも、彼によれば「余詰が出たときが、作品がよりよくなるチャンス」だからです。余詰が出て、作品が不完全だとわかったときは、作品を根本から再考するいい機会なのです。ただ駒を増やして余詰を消しておしまいという作り方では、配置の機能性や美しさの点でマイナスになるだけでなく、思考が凝り固まってしまい、作品の発展の可能性を阻害してしまうことになるのです。

さて、脱線しましたが作図に戻ります。いま、仮想的には以下の図を考えています。

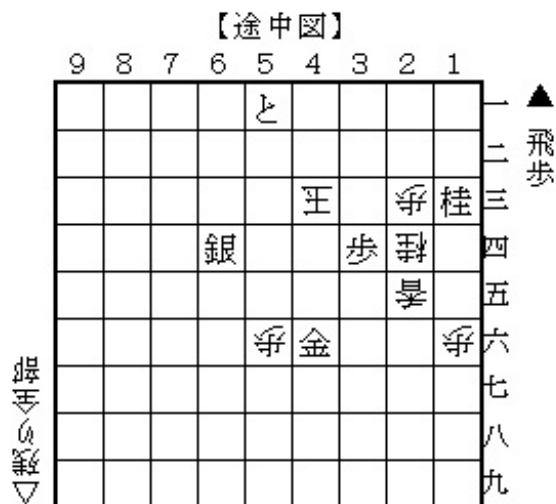


ここから▲21飛、△31桂、▲同飛不成、△52玉、▲53歩、△42玉、▲54桂、△同桂、▲43馬、△同玉、▲33飛成と進んで欲しいわけです。現状では初手の飛車が11からでもいいという非限定もありますが、まあそこはおいおい解決するとします。それより深刻な問題があります。仮想手順の中で、▲31飛不成に対して△42玉と立たれると詰まないのです。そこで玉が42にいけないような工夫が必要になります。たとえば63の卒を桂に変更するというの是一案です。42玉に対し、▲43歩、△52玉、▲64桂までの詰みを用意するのです。しかしなんとなくダサいのでこの図は取りたくありません。ここは完全に感覚の問題で、うまく説明できないのですが。

次に、もう一つ大きな問題があります。仮想手順どおり△52玉と進んだとして、その瞬間▲32飛成、△42合、▲43馬以下詰んでしまうのです。この二つの問題を解決するために、次のような処置を考えてみます。まず、全体を一路上に上げます。

大橋健司 「ドラゴン・パラドックス」 (詰将棋パラダイス 1994.11 看寿賞中編賞)

▲15馬 △24桂打 ▲34歩 △42玉 ▲82飛不成 △51玉
 ▲24馬 △同桂 ▲52歩 △42玉 ▲43歩 △31玉
 ▲23桂 △同歩 ▲32銀成 △同玉 ▲51歩成 △43玉
 ▲52飛成 △44玉 ▲42龍 △43飛 ▲同龍 △同玉 (途中図)
 ▲63飛 △53桂 ▲同飛不成 △34玉 ▲35歩 △44玉
 ▲36桂 △同桂 ▲45金 △同玉 ▲55飛成
 まで35手詰



この途中図以下の手順が、私の考えた収束手順とまるっきり同じです。詳細は省きますが、この作品ではそれを前半の重厚な変化紛れのなかに隠し、また飛車不成をめぐる実に巧妙なパズルに昇華させており、看寿賞も当然の傑作です。これがあつた上では、自作は単に短編にアレンジしただけという価値しかないようです。このドラゴン・パラドックスが念頭にあれば自作は投稿しなかったでしょうし、そもそもきっちり押さえていなければいけない作品で、作っているときに頭をよぎらなかつたというだけでも不勉強のそしりを免れません。というわけで、受賞の知らせを受けてから、一度は編集部から辞退したい旨申し入れました。しかし、北大OBの久保田考哲さんのお力で詰将棋サロン選者の村田顕弘先生、選考委員の浦野真彦先生にご意見をうかがうことができ、結局賞を受ける運びとなりました。ご迷惑をおかけした方々にこの場を借りてお詫びと御礼申し上げます。

さて、ある詰上がりの局面から詰将棋ができる様子をご覧いただきましたがいかがだったでしょうか？ 詰将棋創作初心者の多くは、この逆算法を意外と知りませんので、一応こういう場でご紹介する価値はあるかと思いました。ただ、この方法で作られる作品は、解答者受けはいいのですが、歴史を変えるような傑作になることはあまり多くありません。それでも安定して詰将棋らしいものが作れるという点では、遊びでほんの少し詰将棋を作りたい方々の参考になると思います。この小文が今後エクストリーム詰将棋を試みる方々の一助になればこれ以上の喜びはありません。

駒.zoneの作り方(2)

駒.zoneの作り方(2)

なんとか発表できたvol.1に続き、vol.2の計画を立てている時でした。原稿を書いてみたいという人が現れたのです。後々さまざまな作品を提供してもらうことになる、ikknさんでした。「恋してた！ 将棋カップル」というコーナーにおいて「感想戦」というタイトルで、将棋風味の恋愛体験記を書いていただいたのですが、この作品により「なんでもあり」の方向性が見えてきた気がします。

様々なコーナーを試すものの、自分では何を提供したら喜んでもらえるのかよくわからない状態でした。そんな中皆様からの寄稿により、様々な可能性を発見させてもらったと思います。

基本的にはいただいた原稿をそのまま載せるのですが、パブーではレイアウトの制約があるので、修正のお願いをしたりもしました。編集者っぽくなってきましたね。

またこの号では、たまたまタイトル戦開催が執筆陣の地元だったということもあり、観戦記(のようなもの)もありました。今考えると、自由度がマックスの企画だった気がします。

そしてvol.3において、さらに大きな波がやってきました。贅楽夢さんによる「ツクモさん」シリーズの登場です。小説を書いていただけという話だけでもびっくりでしたが、書き上がったものを見せてもらってさらにびっくり。まずはそのボリューム。確実に長編です。さらにまるぺけさんに挿絵もお願いできるということで、商業誌のようなちゃんとした「作品」が出来上がりました。これ、作品のレベルがすごく高いのですよ。

「ツクモさん」が好評だったこともあり、駒.zoneは「作品を期待される」雑誌になったと思います。それまでは、なんか新しいことやっているな、という感じだったと思うのです。また、私自身が作品を書きまくらなくてもなんとかなりそうだ、と考え大変気持ちが軽くなりました。

この頃から、この雑誌は続けていけそうだ、と手ごたえを感じていました。そして多くの人が文芸作品を楽しんでいること、そして自分も書いてみようという方が現れることがとてもうれしかったです。創作に関わっていると、「書く人＝読む人」という閉塞感にうんざりすることも多いのです。

将棋と文芸を関わせることにより小さい枠に収まるのではなく、枠が広がっていくことになったのです。創作者として本当にラッキーでした。

文字以外のものも載せるようになり、雑誌の幅は広がったと言えます。その中でもvol.6、会場健大さんの「鑑賞物としての詰将棋作品論」は圧巻でした。詰将棋の歴史がわかりやすく描かれています。図面は百を超えています。この号ではツクモさんやチェス小説「フォーチュンテラー・奈々」もあり、文字以外の要素が満載でした。

文字以外の要素が多いとレイアウトに気を遣います。ですが、pdfとe-pub、ウェブではそれぞれ見え方が異なるのである程度でのあきらめも必要です。開き直りですが、パブーで本を作る場合

は何かを犠牲にするしかありません。

また、将棋短歌をツイッターで募集するということもしました。より多くの人から作品を募集しようと思ったのですが、これが思わぬ展開に。「#将棋短歌」というタグだったため、将棋ファンを超え短歌ファンまで広がり、駒.zoneを知らない人たちが短歌をつぶやくまでになりました。中には非常に有名な方までいて、掲載許可をお願いするときは手が震えました。最近はできるだけ駒.zoneオリジナルのタグで投稿してもらえるように考えています。

ここからはお願いになりますが、寄稿をお考えの方には事前に一度連絡をいただき、草稿でいいので締切に余裕のある段階で送っていただくと助かります。基本的に送っていただいた原稿はできる限り掲載したいと考えておりますが、そのためには修正をお願いすることがあります。最初から相談していただくと、修正をできるだけ少なくするアドバイスが行える場合があります。

また、全ての原稿がそろった段階でpdfに出力し、寄稿者の方々にチェックしてもらっています。この点で他の原稿の問題点を指摘してくださる方もおり、非常に助かっています。

そういえば、『紙の駒.zone』というものも作りました。初めて印刷所に頼んで本を作ったのですが、こちらも大変勉強になりました。協力してくださった方には大変お世話になりました。改めてネットの便利さも知ったわけですが、紙には紙の良さもあります。なにより、縦書きです(笑)では、今回はこの辺りで。これからも『駒.zone』をよろしく願います。

浮き駒にきみの手伸びて81マスに沈むプラネタリウム

しばらくはつなぎたくとも懐手100手先にあなたのぬくもり

詰ました指は力なくハンドクリームの残り香に血の後口

どっともっと

盤上に宇宙を描く同じ手で溶けたアイスを弄んでる

頬杖が美しいから恐ろしいいくつの駒を試すのだろう

間駒で間駒で今震えてるその指先の死刑宣告

落波

第一章 桂馬の高跳び

欠片食器

「悪魔たちの誤算、それが玉石です。私たちとは異なる原理で構成されている悪魔たちは、私たちの物理的攻撃を受け付けません。しかし玉石で強化された武器は、彼らを傷つけることができます。それを実行したのが、角さんをはじめとする、別の駒ゾーンの少女たちでした。

次は、失敗は許されません。そのために戦うのにふさわしい人々が出現するまで、待つことにしたのです。外の世界に行くには、最低七つの玉石が必要です。そのために、七人の勇者が現れるための大会を開いていたのです」

龍は、世界の秘密について淡々と語った。権力者に伝承されてきた、昔話も含めて。

「悪魔たちの栄養は、私たちの魂に蓄えられた力です。ですから、私たちが死なないように、できるだけ魂を蓄えて死ぬようにエネルギーをゾーン内に送り込んでいます。そのために私たちは早死にも長生きもせず、また進歩も退化もしないのです。自由を奪われ、人間本来のあり方を失っている。また、世界のほとんども奪われている。悪魔たちは大昔に星の外からやってきて、侵略したのだと言われているのです」

ほえー、と言いたいところを我慢して黙っていたのは桂馬である。桂馬には難しいことはわからぬ。桂馬は飛び跳ねるのが好きな少女に過ぎない。

「そしてこのままでは、悪魔が滅びれば私たちも滅びます。駒ゾーン内の秩序は、悪魔が作っているからです。秩序を、私たちの手に取り戻さなければならない」

頷いている者、口をとがらせている者、口をへの字にしている者がいる。そんな中桂馬は、ただただ瞬きを繰り返していた。

結局、よくわからぬままに話は終わっていた。とにかく桂馬がわかったのは、なんか特別なことがあるなー、ということだった。

「それで、結局どうするのが良いと思う、桂馬ちゃん」

「え、何のこと、銀ころりん」

「ころりんではないわ」

桂馬と銀は、まったりと紅茶を飲んでいて、56地区にあるショッピングモールの一角、駒ゾーンでは人気の喫茶店チェーンにおいてである。

「今日の話よ。悪魔と戦う話」

「ボクは、どうしたらいいか、よくわからないなー」

「そうよね、急に言われてもね」

桂馬は頬杖をついて、精一杯考えてみた。もしもこの世界が、今と違っていたとしたら。龍が言っていたことの中身はわからなかったが、とにかく今とは違う世界があるかもしれない

、というところまでは感じたのである。

日頃から思っていたのは、両親についてだった。桂馬と将の両親は、桂馬がまだ幼い時に亡くなった。寿命だったのだ。うっすらと面影は記憶にあるものの、具体的なことは何も覚えていない。将は、少しだけ思い出を語るができる。それが、うらやましかった。

駒ゾーンでは、それはごく当たり前のことだ。桂馬の両親は結婚が遅く、子供を作る時点でその成長を見届けられないことは覚悟していた。ほとんどの親は、子供が高校に入るのを見ることなく死んでいく。ほとんどの子どもは、一人前になる前に親を失い、コミュニティの人々に育てられる。

当たり前のことだけれども、桂馬の心はざわざわすることがある。奥底の方から湧き上がる、誰かにすがりつき、泣きじゃくり、頭を撫でてもらい、時には叱ってほしいという願望。それらを叶えるには、兄は小さすぎる。

「ここ、いいかな」

突然の声に二人が振り返ると、そこには金髪の女性が立っていた。手にはコーヒーのカップ、腰には黒いポーチを着けていた。

「どなたでしょう」

「私も、知らないなー」

「今から知ってもらうから、大丈夫だよ」

「一体あなた……！」

立ち上がろうとした銀は、椅子が腰から離れないことに気が付き表情を変えた。その様子を見て桂馬も立ち上がろうとしたが、女性が足を踏んでいてびくともしなかった。

「ごめん、ちょっと動けないようにしちゃったんだ。でも、話を聞いてくれたらすぐに解くよ」

腰に巻かれた紐を解こうとした銀だったが、まったくどうにもならない。桂馬は早々と諦めていた。

「どういうつもり」

「駒ガールズが揃ったと聞いて挨拶に来たんだ。プロフォンドゥムの代表として」

「プロフォンドゥム？」

「駒ゾーンの理から逸脱した場所だよ。代々そこで、昔ながらの暮らしを守っている」

「昔ながらの、というのは」

「悪魔の力に頼らない生き方だよ。もちろん太陽や大地の恵みと言ったものは昔のようには受け取れないから、悪戦苦闘の日々だけだね」

「また、わけわかんないぞー」

「お嬢ちゃんも、来てもらえばわかるよ」

「その、プロフォなんとか、にか？」

「そう。ああ、名前がまだだったよね。私は天青。手荒な真似はしたくないけれど、手荒な真似が好きな20歳だよ、よろしく」

銀は、眉間にしわを寄せて差し出された手を握った。桂馬は喜んでその上に手を重ねた。

56地区、商業地区にある高層ビルの一室、外から見ると普通のオフィスだが、中に入ると誰もいなかった。さらに奥の部屋に行くと、そこにはエレベーターの扉があった。

「ひょっとしたら、自分でも気づいていない病気があるかもしれないから、調子悪い時はすぐに言ってね」

エレベーターは約十分間、下降し続けた。桂馬が飛び跳ねないように、銀はずっと肩を押さえていた。

扉が開くと、そこは薄暗く大きな部屋だった。ところどころに木箱が置かれているが、人の気配はなかった。

「あまりにも地下っぽくて逆にびっくり」

「ここはあくまで、本来の場所なんだよ」

「本来？」

「まだこの世界が悪魔に支配される前、鉱物を採掘するために人が作った穴なんだ」

銀が手を離れた瞬間、桂馬はピョンピョンと跳ねまわり始めた。靴の音が、響き渡る。

「低いから気を付けてね」

部屋の奥の扉を開けると、そこは長く続く通路だった。線路が敷かれており、トロッコが一台止まっている。

「おお、おもしろそうだー」

「残念ながら安全運転だよ」

三人が乗り込むと、天青はレバーを引いた。言葉通り、トロッコはゆっくりと進んでいく。空気はひんやりと冷たい。壁はところどころひび割れている。

「この先に人が住んでいるというの」

「そうだよ。私もここで生まれたんだ」

三分ほど進み、天青はレバーを戻した。新たな通路が現れる。

「この先が居住区だよ」

今度は桂馬は飛び跳ねなかった。天井が低かったからである。

今度の道は、壁がごつごつとしていた。ところどころ窪みがあり、そこにライトが設置されている。

「よお、天青」

一人の屈強な男が、向こう側から歩いてきた。銀は軽く会釈し、桂馬は深々と頭を下げた。

「こんにちは。客人を連れてきたよ」

「例の人たちか。まあ、楽しみのないところだけどゆっくりして行ってくれ」

男は笑いながら、通り過ぎて行った。

「傷だらけだった」

銀はしばらく、男の腕を見つめていた。特に男のむき出しになった腕、そこに刻まれたものを。

「人間は本来、傷が消えないんだよ。さあ、うちに案内するよ」

壁には大きな窪みもあり、そこにはだいたい扉や郵便受けがあった。しばらく歩いた後、一つの扉の前で天青は立ち止まった。

「ここが私の家だよ。さあ、入って」

家の中は、外よりも随分と明るかった。布の仕切りで部屋が三つに分けられており、左側は台所、右側にはベッドが並べられていた。その中の一つには、白髪の頭が見えた。

「ばあちゃん、帰って来たよ」

「.....おかえり」

それは、消え入りそうに小さく、がさがさとした声だった。

「ばあちゃん、って、天青のかー？」

「そうだよ。70歳になる」

「すげー」

「お茶でも入れるよ」

家の中には、あまり物がなかった。パソコンもテレビも、冷蔵庫すらなかった。

「発電があまりできないんだよ」

二人の視線に気づいた天青は答えた。

「どうやって、暮らすんだ？」

「なんとかなるもんだよ。一泊していくといい」

天青の入れたお茶は、銀も桂馬も香ったことのないにおいがした。桂馬はそれを、湖のようだと思った。

「桂馬ちゃんは、どう思ったのかい」

朝、部屋には、天青の祖母と桂馬の二人きりだった。天青と銀は散歩に出かけて行った。

「どう、思ったってー？」

「プロフォンドウムさ」

「なんか、不思議。見たことないもの、ばかり。ばあちゃんにもびっくり」

「駒ゾーンには年寄りはいないからねえ」

桂馬は下をペロッと出した。

「昨日、お茶で火傷したの、まだ痛い。びっくりだ」

「それが、普通だったんだよ」

駒ゾーンでは、だいたいの怪我や病気はその日のうちに治ってしまう。そしてほとんどの人は元気なうちに寿命を迎える。だから寝たきりの老人は、まず存在しえない。

「苦しくないの？」

「苦しいよ。けど、孫と暮らせるのは幸せ」

「そっか。ボクはお父さんも、お母さんも知らない」

布団の間から、皺だらけの手がのぞいていた。桂馬は、そっとその手を握った。

「上の人たちは、みんなそうなんだろう」

「うん。みんな、ここで暮らせばいいのに」

「ここは狭い。いつか地上を取り戻した時のために、人間らしい暮らしを残しているに過ぎないんだ」

「なんか、さびしい」

扉の開く音がした。足音は二人分。

「おかえ……銀ころりん！」

銀の衣服はぼろぼろで、額からは血が流れていた。そういう姿自体は見慣れていたものの、今まさにそういうことが起こるとは思えず桂馬はうろたえた。

「ただいま、桂馬ちゃん」

「どうしたの、それーっ」

「たいしたことではないのよ」

「私がつけた傷だよ」

続いて現れた天青の手には、とげの付いた棒を鎖でつないだフレイル、ゴーデングッグが握られていた。

「なんでーっ」

「痛みを伴う戦いの訓練だよ。次は、君の番」

銀が、大きく頷いた。

細く曲がりくねった通路を抜けると、開けた空間に出た。二つのランプがぼんやりと辺りを照らし、どこからかヒューヒューと空気の移動する音が聞こえてくる。

「変な、音」

「風の音だ」

「風……」

桂馬は何かの教科書でその言葉を聞いた気がしたが、よく思い出せなかった。駒ゾーンには風がない。

「そういえば、地上にはないんだった。変化するのは、嫌われるからね」

「変化が、悪いのかー？」

「私たちにとってはいいことさ。だから、悪魔にとっては悪いことなんだよ」

「そーなのか」

天青が立ち止り、振り返った。桂馬も足を止め、両足に力を入れた。

「武器を取って」

「もう、着けてるよー」

桂馬は、踵で地面をたたいた。

「そうなんだね。じゃあ、行くよ」

天青はゴーデングッグを振りかぶり、一気に間合いを詰めてきた。桂馬は斜めに跳んでそれを避けたが、天青は一撃を加えた勢いでもう一回転し、ゴーデングッグの頭は桂馬の右すねをかす

めた。

バランスを崩しながらもなんとか着地した桂馬は、今度は攻勢に出た。力強く踏み切り、右膝を前に突き出す。天青は真後ろにそれを避け、続いての後ろ回し蹴りも体勢を低くしてかわした。

「動きはいい……でも！」

横殴りに振られたゴードンダッグによって、桂馬は間合いから大きく後退せざるを得なかった。

「洗練されてないね。それに……」

次なる天青の踏込に、再び跳躍する桂馬。しかし今度は最初から桂馬の動きを読んで、ゴードンダッグが桂馬の腰を打った。

「うわっ」

地面とぶつかり、もんどりうつ桂馬。天青は仁王立ちになってそれを見下ろす。

「私が悪魔ならば、次の一撃で殺されているよ。やはり君たちは、死に対する恐れがない。恐れがないから、選択が甘くなってるんだよ」

「ううー……」

桂馬は、思い出そうとしていた。銀や、将や、その他の仲間がいる時のことを。誰かに見守られながら、励まされながら戦う時のことを。彼女は、誰かと共にいることが好きで、一人でいることが嫌いで、だから、一人で戦うことも嫌いだった。

右手で、マフラーを握りしめる。

「お母さん……」

天青の視界が、黄色く染まった。桂馬の右手から伸びたマフラーが、まるで意志を持っているかのように伸びていたのだ。そして、まっすぐに桂馬の体が跳んでいた。桂馬の履いている靴が大きく弾力を変え、ゼロ距離からの跳躍を可能にしているのだ。そして、桂馬の右足が大きく振り回される。靴は一気に固くなっている。

仕留めた一っ、と桂馬は思った。けれども、蹴られたのは天青の体ではなくゴードンダッグの柄だった。両手で武器を支え、なんとか軌道を予想して攻撃を防いだのだ。

マフラーが落ちても、天青の視界には桂馬の姿がなかった。ゴードンダッグを蹴って、桂馬の体は高く飛んでいた。構え直そうとする天青だったが、間に合わなかった。天井を蹴って、桂馬の体は加速して落ちてきたのだ。桂馬のひじが、天青の頬を撃ち抜いた。

「君……驚くほど……攻撃力が弱い……」

頬をさすりながら、天青が言った。桂馬は着地がうまくできずに、地面に突っ伏している。

「蹴りじゃ……間に合わないからー……」

「まあいい、合格だよ。やっぱり才能はあるみたいだね」

天青は、桂馬の体を抱え上げた。桂馬は今さらながらすねから出血していることに気付き、顔をゆがめた。

「I'm so excited !」

巨大なハンマーを持つ女、飛車が叫んだ。

「静かにするように言われていますことよ」

「細かいこと言うなよお」

隣を歩くのは金色の服に金色の傘を差す少女、金。

二人が歩くのは、真っ白な廊下だった。何も無いように見えるが、実際には監視カメラとセンサーだらけである。

この施設の名はカルケル。重罪人が監禁されている場所である。

「いやあ、こんなところ普通来れないもんなあ」

「飛車さんは酔った勢いで悪いことをしていつか入れられてしまう気がしますわ」

二人の進む先には、二人の警察官がいた。その奥には牢屋。

「なんだ、鎌女じゃないんだ」

鉄格子の向こうから、女の声。

「あらあら、角ちゃんの事かしら」

「It's funny. なるほど、確かにこれはなかなか」

足には枷、そして背中後ろで翼がくくりつけられていた。

「何しに来たのさ」

「捕まった人に聞くことと言ったら、雇い主のことと相場が決まっていますことよ。それともお気に入りのアイドルについてでも話しましょうか」

「どちらも遠慮する」

「ま、そう言うなよ。義理立てするほどいい扱い受けてるわけでもないんだろ」

「何を知っているわけでもないくせに」

飛車は背中からハンマーを下ろし、壁に立てかけた。

「No, no. 知らないからこれから知りたいの。あんたみたいなスパイが何人いるのかもね」

「スパイだとして教えると思う？」

「まあ、可能性がゼロじゃなきゃ試してみたいんじゃないかなと、と思うわけよ。私たちが狙われる身となった以上、色々と手を打ちたいし」

林檎は上目づかいに飛車を見上げ、喉の奥で笑った。

「所詮人間は家畜。どうあがいても勝てっこない」

「家畜がいなくなれば、悪魔だって飢え死にするんだろ」

「.....やはり、鎌女が全て知っているわけだ」

「ううむ、鎌女って最高なネーミングだな」

金が、傘を畳んで、手元を回転させた。石突から、鋭い刃が現れる。

「もちろんあなたには黙っている権利がありますわ。ですが、こちらにも攻撃する自由があるということは事前にお知らせしておきますわ」

目を細め、口角を挙げる金。林檎は、背筋に冷たいものを感じた。脅しというよりは、純粋な好奇心、傷付けたらどうなるかを知りたがっているように見えたからであり、それは正解だった

。

「ほどほどにしとけよ、金」

「わかっておりますわ。玉石の効果で、死んでしまうかもしれないのですよね。わかっていますわ」

「いやな、予感」

エレベーターのドアが開いた瞬間、角がつぶやいた。

「何か感じるの？」

将が聞いた。

「そう。ゾーンの外というだけじゃない」

「早く二人に合流しよう」

二人はトロッコに乗りこんだ。角が、手慣れた様子でレバーを引く。しかし、トンネルを抜ける直前で角はレバーを戻した。

「将は、ここで待っていて」

トロッコを抜け出し、駆けていく角。

「ちょっと、待って」

「生身の人間は、立ち入り禁止」

角の視界には、黒く大きな翼がゆらゆらと揺れていた。2メートル近い長軀に、筋肉の張り裂けそうな腕。

「久しぶりですね、お嬢さん」

角は、鎌を大きく振りかぶった。

「手を出さないでよ！」

翼の向こう側から、声が聞こえた。とげの付いたヘッドを持つメイス、ゴードンダッグを手にする女性。

「プライドをかける相手じゃ、ない」

「私は、この日のためにここで生きてきたんだよ」

天青は立ち上がった。眉間から血が流れ、左腕はだらんと垂れ下がっている。

「私は二人相手でも構いませんよ。ただ、本当は戦いに来たわけではないんですけどね」

「本当か」

角の後ろからも、声。将だった。

「待っていると言った」

「作戦を決めるのは僕だよ、角ちゃん」

「……」

将は角よりも一歩前に出て、頭を下げた。翼の者は振り返り、将の姿勢を見て目を丸くし、自分も頭を下げた。

「駒ガールズ、コマンドーの将だ。僕らも戦うつもりで来たんじゃない。用件があるなら聞く」
「私はクラウン・シールドの寄勢。プロフォンドゥムの存在は気付いていましたが、少し靈気が薄いのであまり来たくなかったですよ」

「それなのになぜわざわざここに」

「まあ、いつでも手を下せるということを示すためです。あなたたち人間には希望などないということをお知らせしたいわけです」

「でも、僕たちがいなくなると困るのは君たちの方じゃないのか」

「あなたたちは家畜の懇願を聞いて柵を壊しますか？ 野菜の叫びを聞いて食べるのをやめますか？ 私たちを困らせるために人間が絶滅を選ぶというのならあきらめましょう。しかしそれはできないとわかっています。また、あなたたちに勝ち目がないということも」

「忠告は受けとります。ただ、勝ち目というのはまだよくわからないので、こちらの意思決定は随分先になるかと」

「面白い人です」

寄勢は翼で身を隠すように覆うと、低い声で笑った。

「次に会う時は、殺します」

翼が大きく解放された瞬間、灯りがすべて消えた。ほんの数秒だったが、灯りが点いたときには寄勢の姿はなかった。

「大丈夫か、天青」

「命ある限り大丈夫だよ」

「二人は」

「寝てる。まだ、傷を癒す体力が足りないようだ」

「そうか」

角が天青に歩み寄ろうとすると、目の前で将ががくんと膝をついた。

「恐かった……」

「よくやった。おかげで生き長らえた」

角は、将の肩に手を置いた。

「ただ、人の忠告も聞くものだ」

「桂馬ちゃん、出発の時間よ」

「わかってるっ。ちょっと待って」

桂馬は、ばんそうこの張られた鼻をさすった。かすり傷だが、完治しなかった。

「ばあちゃん、行くね」

「そうか。静かになっちまうねえ」

「また来るー」

「待ってるよ」

桂馬はピョンピョンと跳ねながら、手を振った。少し視界がぼやけていたので、壁にぶつかり

そうになった。

「桂馬の高跳び、危ないなあ」

それを見ながら、将はつぶやいた。そして桂馬は、柱におでこをぶつけた。

「元気だよね」

天青は目を細めた。横で銀が小さく頷く。

桂馬は手を振りながら、後ろ向きに歩いている。五人は途中まで共に進み、そして天青が立ち止った。

「皆さん、お元気で」

「天青さんも、ね」

「また来るからな、絶対ー」

桂馬はさらに大きく手を振って、大きく飛び跳ねた。

「待ってるよ」

角は、キャスケットの端をつまんで、声を出さずに一言、示した。天青も、口だけ動かして返した。それは誰の目にも、「ありがとう」だった。

用語集

悪魔 世界を侵略した地球外生物。死霊の持つエネルギーを通過させることにより生きていけるため、人間たちを駒ゾーン内に閉じ込め、死なないように生きすぎないように調整している。

カルケル 駒ゾーンにある牢獄。すべての壁が白く、継ぎ目もほとんど見えない。

キャスケット 角が愛用している、つばの短い帽子。女の子の髪が少しこぼれている様子が大変かわいい。

玉石 鈍い緑色の石。武器に調合すると力が宿り、悪魔にも傷をつけることができる。

銀ころりん 桂馬が銀を呼ぶ愛称。銀は嫌がっているが、桂馬はやめる様子がない。

クラウン・シールド 悪魔の代表的な戦士たち。

ゴーデンダッグ とげの付いた棒と長い柄を鎖でつないだフレイル。

駒ガールズ 玉石を備えた武器を持つ少女が七人そろった時呼ばれる呼称。かつて角は別の駒ゾーンでも駒ガールズだった。

駒ゾーン 悪魔が人間を閉じ込めている結界。怪我や病気は必ず治るが、成人して数年すると必ず死ぬ。また、死んだ分だけ生き返り、人口が一定している。

コマンダー チームの指揮官。男性が多い。

サイドレール 駒ゾーンを走る電車。脱線防止と安定走行のため、側面に車輪がついている。車両はさまざまな色がある。

手甲爪 甲の部分から爪の生えた鉤爪。傷付けることが主な用途だが、歩はよく突き刺す。

セーラー服 角が愛用しているが、駒ゾーンには軍隊という概念がなく、「元水兵の服」という知識もない。

地区 駒ゾーンには9×9の81地区があり、全て同じ面積である。悪魔が条坊制を参考に作らせたかどうかは定かではない。

使い魔 悪魔の指示に従う人型の存在。翼はあるが飛べない。エネルギー源は食物で、駒ゾーン内でも生きていける。

テーサウルス・シュトライテ 週末にプリンキビウムで行われる、各地区代表七対七による格闘戦。当日抽選で対戦相手が決まり、勝ったチームには玉石が一つ支給される。

膝十字 相手を寝かせて、膝を両手で極めて固める技。

プリンキビウム 人類が最初に降り立った場所とされるドーム型格闘技場。客席は滅多に解放されることなく、メインリングの試合がテレビ中継され、残りの試合も録画中継される。

プロフォンドウム かつて鉱物採掘のために掘られた穴。駒ゾーンの範囲外のため、かつての人間と同じ生活を送ることができる。

モルゲンステルン 先端の鉄球部分にとげの付いたメイス。モーニングスターと言われることも。

ワキ固め 腕を取って肘を固める技。スタンドでもかけられる。

皆様お久しぶりです。第八号です。

今号では「七割未満」が完結し、「駒.zoneガールズ」の連載が始まりました。一つの節目になる号だと思います。

将棋界にもいろいろありまして、ソフトと戦っているのはその中でも特に大きな出来事ではないでしょうか。そのことも意識して、「電将短歌」という企画を行ってみました。良い作品が集まったと思います。

また最近是将棋を題材にした作品も増えてきましたね。こちらも負けてはいられない、という気持ちです。そんなわけで駒娘たちがついに動き始めたわけですが、まさかのSF格闘モノ(?)ということで、これまでにない空気感が出ているのではないかと思います。

考えてみると、将棋小説を書き始めてから5年が経ちました。その間にいろいろなことがありましたが、将棋と創作の関係は非常に接近したと思います。ただ、この後安定期に入るのか、廃れていくのかは予断を許さない状況だと思っています。あれです、今の将棋の状況は、総合格闘技のブームと似通った点が多々あるもので不安なのですよ、はい。流行が去っていったとしても、将棋の魅力が失われるわけではありません。そのときに備えて、駒.zoneは地道に続けていければと思っています。どんな状況になっても、私は将棋と創作を愛します。

では、また第9号でお会いしましょう！

作者紹介

執筆

清水らくは(落波)

浮島

欠片食器

会場健大

どっともっと

跳馬

なしも

しゅう

しむしむ

イラスト

まるぺけ

若葉

編集

清水らくは

発行

無責任.zone

広告

バックナンバー

[vol.1](#)

[vol.2](#)

[vol.3](#)

[vol.4](#)

[vol.5](#)

[vol.6](#)

[vol.7](#)



将棋小説

[『五割一分』](#)

[『レイピアペンダント』](#)

[『明日こそジンジャーティー』](#)

[『海の81マス』](#)

ブロマガ

[駒.zone+](#)

ブログ

[駒.zonecom](#)

メールマガジン

[駒.zone通信](#)

『紙の駒.zone』



(通販に関しては[ブログ記事](#)をご参照ください)

